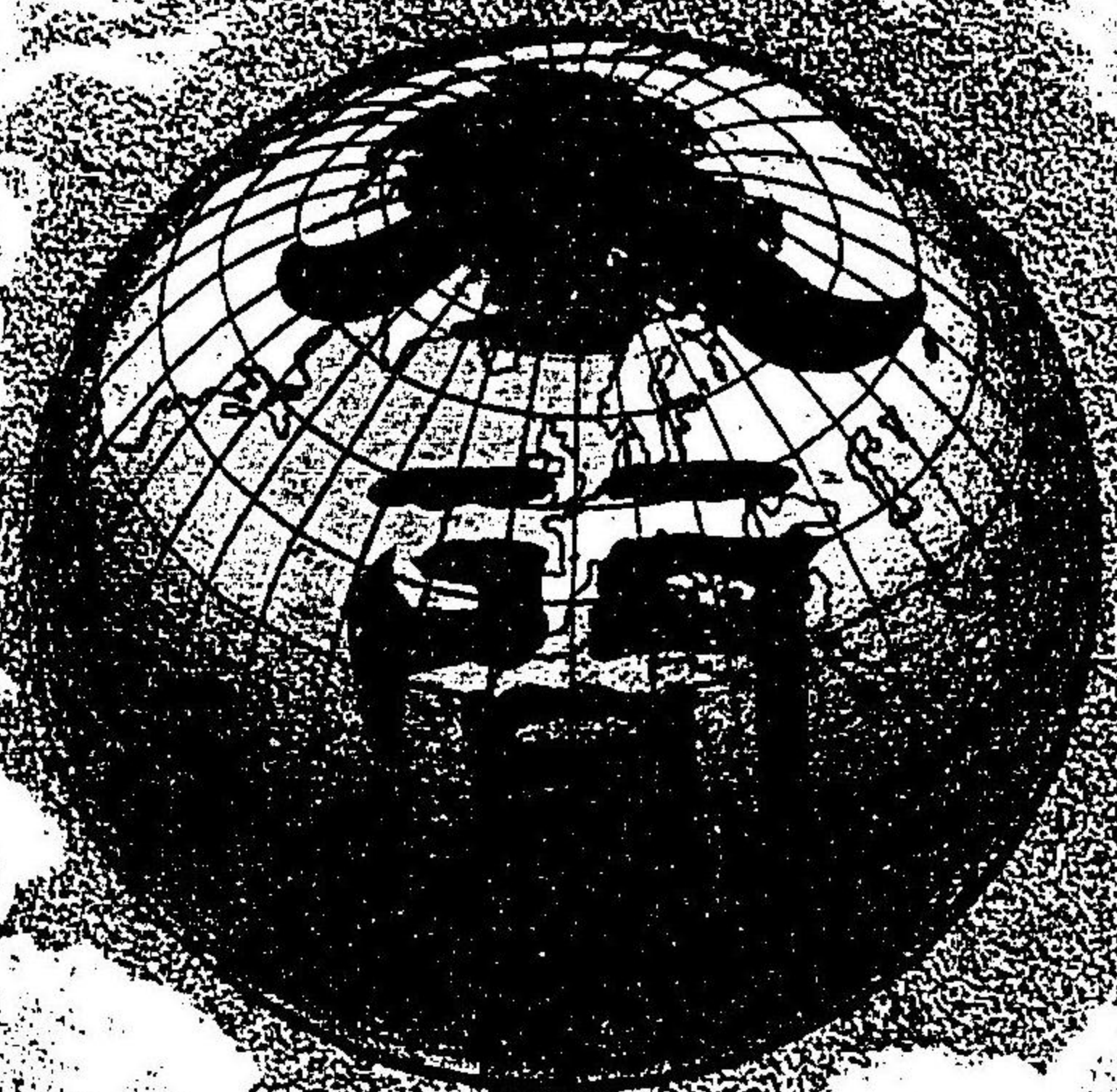
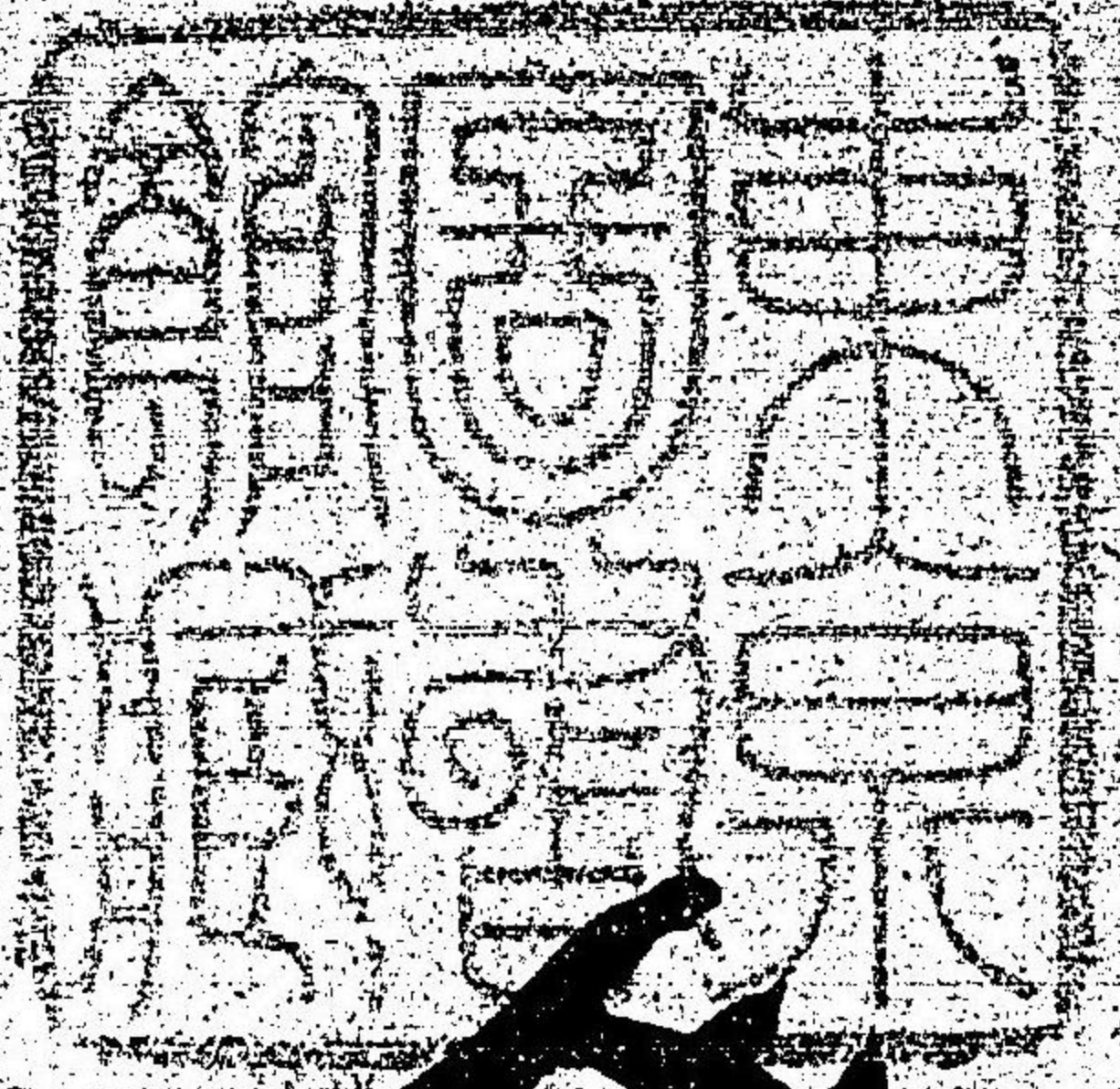


土屋 輝 著



高 山 堂 版

特21
972



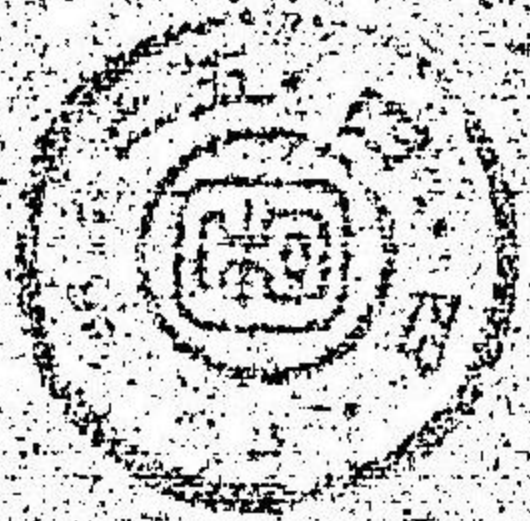
人

土居通豫著

簡

東京

嵩山堂出版



序



忽爲天集地震山河壞裂棟梁
摧折祝融噴雨風伯吼百萬生
靈肉爛骨碎悲哀呼天方此時
有勇奮義烈不顧己救生捨屍

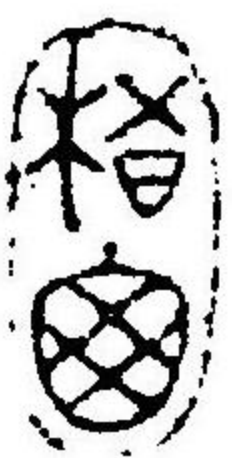
巨浪洗血飢舌舐傷者是唯靈
活之精神能役其身軀而已有
此精神而後身脩焉家齊焉國
治焉人聞完焉而久道赫灼天
地始歸平和矣震後探匣中得

此稿治存偶友八嵩山堂主人
請上梓因聊冊訂而授之乃題
弋言于卷端
明治廿四年大地震後二十有
八夜餘震未歇時於名古屋僑

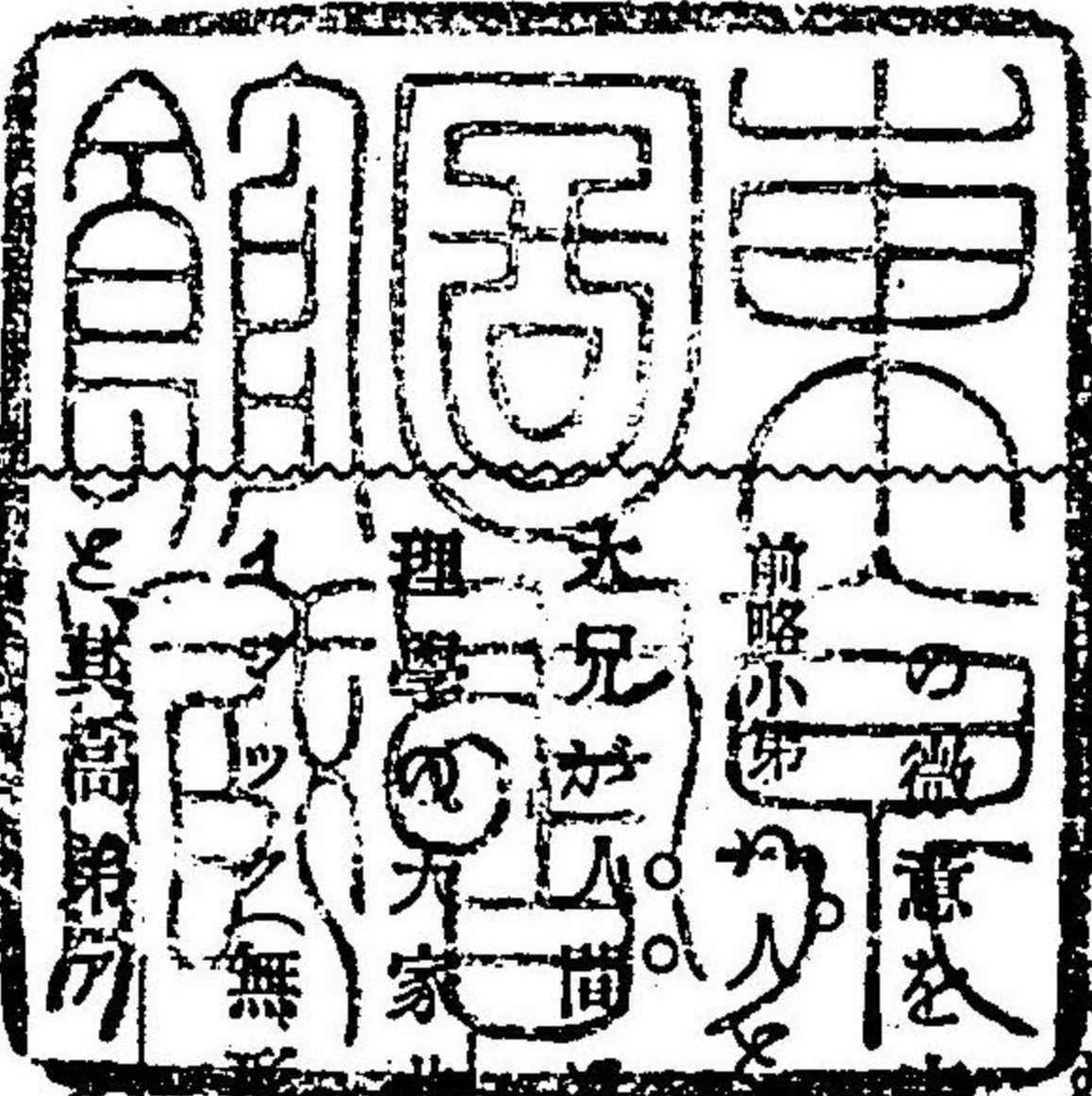
居櫓傾壁破紙燈黯澹之處
 南海鍾鍾漁郎香國識



南海堂主人書



友人古木氏此頃一書を寄せらる、其中に予が此著あると聞き参考の爲にするとして、尤も有益なる數言を記載せられたる、因て之れを抄出して本書に掲げ、以て其厚意を感謝する



の微意を表すと云ふ。
 前略示第...と云ふ解釋に就て多少思考を勞せしことも有之、
 大兄が人間と云ふ御著書、將さに梓に上らんとするを聞き、心
 理學の大家...、ウイルリヤム、ハミルトン先生の著書、メタフ
 ...無形理學第九章一百十三頁より以下に、ソクレテス
 ...と、其高給...シビエーツとの問答の記あるを抄出し、以て貴
 覽に供すと云々、

ソ氏曰く、今ま汝の誰れと物語りせると思ふや、予とに非せ
 や、
 ア氏曰く、然り、

ソ氏曰く、予の汝と共に居るや、

ア氏曰く然り、

ソ氏曰く、然らば物語り居るもの者のソクレチスに非らむや、

ア氏曰く、確に然り、

ソ氏曰く、此の物語を聞く者のアルシビエーツに非らむや

ア氏曰く、然り、

ソ氏曰く、其のソクレチスが物語るに、詞と云ふものを用ゆるにあらむや、

ア氏曰く、勿論なり、

ソ氏曰く、物語ること、詞を用ゆること、との同じ事にあらむや、

ア氏曰く、甚だ同じ事なり、

ソ氏曰く、此處に物を使ふ人と、使はるゝ物とあり、……

此等への果して其相違あるにあらむや、

ア氏曰く、先生の今ま何を指して云ひ給へるや、

ソ氏曰く、此處に一人の柔皮匠あり、……彼れの小刀、又他の切れ物を使ふにあらむや、

ア氏曰く、然り、

ソ氏曰く、此の小刀を使ふものと、使はるゝ小刀との相違あるにあらむや、

ア氏曰く、最も然り、

ソ氏曰く、同一の法に随ひ、此に彈琴者あり、彼れと彼れが彈むる琴との同からざるにあらむや、

ア氏曰く、愈々然り、

ソ氏曰く、然らば予が汝に問ふんと欲せしもの乃ち是

れなり、……物を使ふ人と、其使わるゝ物との汝の眼に
 の、常に同からざるに見ゆるにあらざや。

ア氏曰く、甚だ同からざるに見ゆ。

ソ氏曰く、されども其柔皮匠が皮を研るに、唯其器具のみを
 使ふや、或は又他に己が腕をも使ふにあらざや。

ア氏曰く、腕をも、……

ソ氏曰く、然らば彼れの腕をも使ふや。

ア氏曰く、然り。

ソ氏曰く、而して其用を爲すに當りて彼れの復其目をも使
 ふや。

ア氏曰く、然り。

ソ氏曰く、然らば物を使ふ人と、其使わるゝ物と、異なれば承
 知なるや。

ア氏曰く、承知せり。

ソ氏曰く、然らば柔皮匠と、彈琴者との、其の用を爲すに使ふ
 ところの目と腕との同からざる乎。

ア氏曰く、左様に見ゆるなり。

ソ氏曰く、然らば、今ま人の其身體を使ふにあらざや。

ア氏曰く、實に然り。

ソ氏曰く、且つ其使ふ所の人と、其使はるゝ物との、異なれる
 を承知なるや。

ア氏曰く、承知なり。

ソ氏曰く、故に人のその身體との異なれるにあらざや。

ア氏曰く、左様に思ふ、……

ソ氏曰く、然らば人との何ぞや。

ア氏對ふる能はき。

ソ氏曰く、汝が其身體を使ふところのもの、人であること云ひ得るや、

ア氏曰く、實に然り、

ソ氏曰く、心の外に何物にてもその身體を使ひ得るや、

ア氏曰く、何物も使ふ能はず、

ソ氏曰く、故に心、人なるや、

ア氏曰く、心のみが人なり、

以上

明治廿四年十二月晦日

著者識

人間目次

第一	研究……………	一
第二	人間の本性……………	三
第三	國家の腦髓……………	十八
第四	萬物の進化……………	二十九
第五	天則の普及……………	三十五
第六	善惡の岐路……………	四十二
第七	良心の監識……………	四十九
第八	精神の靈活……………	六十一
第九	最大希望……………	七十一
第十	新天新地……………	七十八

人間

土居通豫述

第一 研究

人間也者果何物

予は曾て人間と何物ぞやとの事につき、大に考ふる所ありしが、この二十年來聖賢の書を読み、或ハ學者に質し、或ハ自己の經驗に訴へ、なほして稍々悟る所あり、其悟りし所のもの、一聯の志想となりて、門下の諸生に向て説話すること、なれり、されバ此説話中にハ聖賢の教理あり、學者の考説もあり、されど一々其姓名を擧るハ事煩はしければ、成るべく省略するとなしぬ、而して予ハ曾て新聞の業に従事して、社會の爲に少く盡す所ありしも、多くの官途に従事して、朝夕公務の繁多なる、此等人生の大問題を考察すべきの暇少なし、されども人道ハ人間須臾も離る可らざるもの、如何に焦眉の急に際するも、

道也者不可須臾離

眞理在研究之中

一歩も他に^〇枉ぐべからざるものなれば、幸ひに公務執掌の間に考察を廻らし、家に在るの間、此の說話をなし、遂に二三子の勞を借りて文字に移せり、其言ふ所固より奇を尊ふに非らば、妙を喜ぶに非らば、只それ人間に宜く、斯くの如くならざるべからば、どの理を云ふのみ若し、夫れ説の誤れるあらば、讀者幸ひに教示を垂れよ、眞理の實に研究の中に在るなり。

人の此世に生る、や、既に其具備れる人道の履行せざる可らざるものあり、然るに如何にせん、人々私慾の爲めに誤られ、眞に其道を履み行ふ者少し、これ人々幾分か人道の何物たるを解せるも、時に情慾の爲めに、惡習慣の爲めに、惑はさる、に因るものなれば、我儕人間に人間たるの道を一層よく精密に研究し、其心の落着き所を定め、此所を我立場なりとの動かざる点にまで達せんことを努むべし、固よりかく申す予にては、淺學

人宜占得其立脚地步

身體與精神相關處宜研究探討

寡聞にして、未だ眞に人道の極所までも究め得たりと云ふに、あられざれども、今日まで幾分か考察したる上に於て、其人道と認る所を述べ、以て諸君と共に之を研究せんとす、今先づ其論旨を述べ、大體人間の肉体と精神との二者に關係ある所のものを説明するものにして、即ち我儕が此世に生れたるの何の爲めなるか、其望む所のもの、何處にあるか、又之を達するに、如何なる方法に由るべきかを論ずるに在るなり。

第二 人間乃本性

人間の先づ第一に研究すべきは、我儕の何故に此世に生れ來りしやとの事を尋ると是れなり、即ち己を知るの人間第一の要務たるなり、而してこの疑問の起ると同時に、己が歩むべき人道を研究するの念慮の忽焉として、心頭に浮び來るべし、今人間の何故に此世に生れ來りしかとの事を考ふれば、如何な

吾人何故生出于世乎
知自己是吾人要務

人有生死能
知他人死能
知之

人間有乎將
無乎

人生果有焉
底甲大格言

る感想を起し來るや誰にても人間の今日に生るゝも早晚死
するとのとの從來の經驗即ち他人の生死するを視て判然た
るべし然るときは人間の生活するが本体なるか將た死滅す
るが本体なるか所謂有の者か無の者かとの考起るべしこれ
古來人々の腦漿を絞りし一大問題なり論者によりて天地
萬物唯一の觀念に在りとするより人間の世に在るの夢か幻
の如く有るが如きも寧ろ全く無ものと断定せり然れども熟
々考ふれば果して無ものとの断定する能はざるなり何とな
れハ靜にこの「我」なるものを顧れば如何にも我なる者存せる
に相違なく到底之を無視する能はざればなり此事たる敢
て予が一己の意見にあらざれば彼の佛國の學者デカートの思考
發明せし所の大眞理にして實に千古不滅の大原理となれり
彼れ一日一室に坐し從來已が腦裡に蓄へたる許多の思考を

心考之目視
之豈得謂之
無哉

於理化學證
其有

除去し虚心平氣瞑目沈思以てその所謂「我」なる者に就て考へ
しに其歸する所一の志想を生し出せり曰く「我れはかく考ふ故
に我在るなり」と實にこのデカートの断定の正確証ふ可らざ
るものなりもし我なる者無しとせば其心に考ふるとも亦目
に見るともなかるべし既に心に考ふるに見るとありとせば
其考ふるもの見る者の存在せるの明白にして疑ふ可らざる
の事實なり又理化學の事に就て考ふるに總て天地間の事物
のたどひ其形を失ふも全く消滅するものにはあらざり乃ち盆
水の日を経て一滴だも残さざるに至るの俗に之を涸盡たり
と云ふも其實の蒸發して空中に騰りたるのみ何時か雨とな
りて復た地上に降下するところあり又薪炭を燃すとき火とな
り烟となりて空中に騰りたる一部分の死灰を留るのみなるが
如し然れども其薪炭に舍める所の炭素の空中の酸素と化合

肉身歸物質
精靈歸空靈

天地萬物歸
于一
喜有嫌無欲
生忌死是人
性

情慾過度忽
殺人

人常望未來
樂未來故以
生焉不然絕
望死滅而已

陷真理以
生存焉

し、以て炭酸瓦斯なるものを作り、地上の植物の之を吸収し、而
て動物の又其植物を食し、以て其身体の部分を組成す、今それ、
人間の身体の如きも物質より成立ち、其身死すれば全く無に
歸するが如く思はる、然れども是亦然らむして、たゞ元の原素
に還るに過ぎむ、又其身体に包圍せらるゝ所の精神なるもの
も、既に存在する者とする以上、彼の肉体死せし後、其原素に
還る如く、また必き靈妙なるものとならざる可らむ、嗚呼、人既
にあり、されば宇宙萬物あり、故に上帝確に在り、猶同千万の數
の一より出てたるが如く、而して一の數の如何程之を割るも
矢張り一の數を出すものなり、宇宙萬物之れを推究すれば、一
に歸すべし、是れ乃ち道なり、誠なり、命なり、上帝なり、勢力なり、
凡そ人間の有を喜び、無を嫌ひ、生を欲し、死を忌む、是れ人情の
常なり、時に或は自ら其身を殺す者あるも、能く其胸中を探れ

の、決して初より死を欲するにあらむ、たゞ其人や、此世の苦惱
を厭ひ、安樂を求め、過度の情慾に驅役せられ、之を遂んと欲す
るも、遂ぐる能はむ、遂に厭世の念を起し、寧ろ死して、以て安
然を得んと欲せしに囚る、かの或る宗教徒の如き、往々にし
て此迷妄に陥るとあり、是れ彼等の其教義の深奥を解せむ、無
を以て本体とするが故なり、されば人の死に臨むや、右に述る
如き厭世家自殺者の他の、皆此世を去るも、別に我儕を満足せ
しむべき幸福界ありとの考を抱かざる者はなし、是れ我儕が
人の此世を去らんとするときの有様を見て、知得する所なり、
又現に生存せる我儕の胸中を叩くも、沈思黙想すれば、此感を
起すに相違なし、是れ即ち前にも云へる如く、我儕有るものな
れば、後復た必き無る可らむとの真理より、生むるものなり、
然れば人間の飽までも、此世に生存せざるべからむとの最も

眞中無虚
中無眞

天理に合るとなり、乃ち生存の人道の顯る、根本なり、其生存の決して虚にあらざり、事實なり、之を實際に徴するも、理論より考ふるも、物理の法則より推究するも、或は化學上より實驗するも、亦明かなり、而して人間の眞理に因て始めて生き、生きて始めて存じ、以て道を踏み守るべきものなり、然り、而て其眞理の中に、幾分と雖も、決して虚を容るべきにあらざり、若し人己れが行ふ所、幾分なりとも、眞理の外に出れば、是れ即ち道を外れたる者なり、此の如き道理なるを以て、凡て人、眞理を知ると否との其性命に關係を及すと大なり、又其生存にも大なる關係を及すものなり、然らば、我儕の如何に此の世を進行くかを考ふるべきに、此に顯著なる條理なかる可らざるを知るべし、故に我儕の十分之を探究し、所謂其踏べきの道、即ち眞理を發見せざる可らざるなり。

要闡發眞理

人豈無其任哉

今我儕熟ら已が身体の構造を見るに、その四肢五官の活動する有様や、まことに巧妙緻密にして、如何に名手なる油畫師もかくの精妙に描き出すと能はざるなり、而て今茲に一人の油畫師あり、頻りに其心思を凝らし、年月を経て、漸く一の人像を巧に描き得たりとせん、その人の此人像を博覽會にも出品せむ、直に之を墨もて塗抹すべきか、恐らくは狂人にあらざるより、かゝる無法の舉動を爲すものなかるべし、此に由て是を觀るも、人間が彼の精神と、その精神の宿る所の身体とを備へて、此世に來る以上の其來るの必要なべからざり、唯此世に生れて無爲徒食して去るの理なきと、判然たり、然らば、又是に於て人間の此世に生れたるの何の必要ありて然るやとの問題起るべし、我儕の今此事に就き志慮を費さざる可らざり、試みに頭を擧て天上を見よ、日月あり、星辰あり、皆煌々として

大空に輝けり、又伏して地上を見よ、山川草木布置配合の宜きを得たる、鳥獸蟲魚の其間に飛走游泳する、又時として天の晴朗恰かも拭ふが如きあれ、或の妖雲陰々墨めて抹するが如きあり、或の風吹き雨降り、或の雲花飛び雹丸躍り、或の晝あり夜あり、或の樂く愛しき春去れば、温熱なる夏來りて新緑流る、が如く、是に續て萬物を殺死せしむるの悲秋の端なく襲ひ來りて、無味乾涸なる嚴冬の續て四時の終尾をなす、眼を轉じて蒼海を見渡せば、漫々其際涯を見ざる洋海、碧波萬仞なる所、魚介其幾千万種なるを知らせ、凡そ萬物の生々活潑なるを、此の如し、而して我儕人間の如何にして生存するか、食物を作りて之を食ひ、衣服を織て之を着、家を構て之に棲み、有を以て無に換ふ、是に於て社會なるもの生を、而してこの衣食住の道を全ふし、人々相互の安全を守らんとするや、一の國家を組織し、この所謂政府なるものを建設す、今此等の情態につき考ふるべきは、我儕人間を圍繞せる万物万事、一として我儕の生存の爲めに必要ならざるなし、此の如く天の我儕人間に惠深く、其生存を助くるに、唯り人間の知識幼稚にして、未だ其生存の目的を達する能はざり、或の天災地變の爲めに斃れ、或の流行病に襲はれて死し、或の戦亂の爲めに、或の猛獸毒蛇の爲めに害せられ、或の人々相殺し、甚しき自殺する者さへあり、是皆人間自から本然の性質に由て生存すべきものたることを忘却し、其生存すべき道に循行せざるが故に、其目的を達せざるものなり、

社會者生于
此國家者成
于此政府者
建于此

人頼萬物而
生存焉

人求其生存
道而不得可
慨可憐

然らば人間の道は何れにありやと問はゞ、矢張り生存にありと答へざるを得、この生存の道を真正に踏み行はゞ必ぞ存すべし、然れどもその生存に就ての最も注意すべきとあり、

人以精神爲本

非老久耳士
曰爾者乃靈
魂也其身體
唯爾之有耳

その第一人間の世に生存せる根本にあり、今其根本の如何と問ふに、即ち一の精神に在り、此の精神なるもの常に活動して始めて、肉体の用あり、精神もし、腐敗せば、假令ひ、肉体生きて働いとも、更に、人間たるの効能を爲さず、故に人道を研究せんと欲せば、先づ精神と肉体との關係、語を換れ、身体の原則を明にせざる可らむ、通常人々の考にては、肉体ありて精神是れに附屬せるもの、如く思ふも、決して然らむして、精神こそ源となり、肉体之に附屬し、精神の天より來り、肉体の地より生るものなり、或る學者の靈魂と精神の別をなして曰く、靈魂の美術的、社会的、才智的なり、精神の敬虔的、信仰的、希望的なり、兩者并び動きて始めて其用を全ふすと、予の本書に單に精神の字を用ひたり、之れを一々區別するときは、文繁にして却て讀者の惑を來さんことを恐るなり、故に精神と用ひたる内に、靈魂の字をも包有したるもあり、と知るべし、既に述し如く、佛國の學者デカールが「我在る」と斷定せし、乃ち人間の人間たる本性を顯せしものなり、英語にては人を「マン」と

人者思考器也

云ひ、枕語にて「マナー」と云ふ、共に考ふるとの義なり、されば人の考ふる者なり、もし人にして思考力なからんか、則ち禽獸と同じのみ、故に人間は己が五官に感觸する所のものを取て、よく之を考へ、その考へたる上に於て、是の果して道理に合へるとの、とを發見したらんに、直に之を踐行ふべきなり、是れ即ち生存の道に適へるものなり、故に人間の生存の道理を發明して之を行ふこそ第一肝要の事なれ、

然り而して、人間の一人一個唯自己のみ世に存ふべきものにあらむ、たとへば、或一孤島に、唯獨り人間の放流せられしとありとせよ、其困難や實に言ふ可らむ、先づ彼の一人にて家を造り、食物も衣類も亦一人にて製らざる可らむ、此の如くにして安んぞ能く永く生存するを得んや、然らば人間の數人相集りて、村を爲し、町を爲し、郡を爲し、市を爲し、縣を爲し、國を爲し、

社會組織

人把萬物供
自已用乃是
經濟原理

人事多贅冗
是忘生存之
要故而己

遂に一の此の世界を爲せり、然り而して此集合により有無相補ひ、長短相輔け、而して各自分業をなし、所謂經濟の基源に成る。蓋し總て人間の爲す所一として、其生存の爲めにあらざるはなし、即ち人間各自其思想を研き立て、而て世界の千差万別皆取て以て己が生存の用に供するものなり、然れども人智の未だ開けざる間、其天地間の万有を取て、己の生存に供するを極めて少き而已ならむ、其生存の目的を忘れ、種々目的の外に奔ること多し、然れども人間に、乃ち其考ふると云ふ所の意思が、自由自在に賦與せられたるにより、其考へが弘まりて、此世に充滿し、其生存に必要なものを考へ出し、種々の事物を製り出すなり、例へば昔時の舟に至て脆弱なるも、追々精巧なるものを製り、又昔時の醫術の熱病痘瘡など充分に治療するに能はざりしも、今日の醫學大に進み、従前難治の者も容

易く治療せられ、又食物の如きも昔時の料理法の極めて粗末なりしも、追々進歩して人体に適するものとなれり、今日日本の料理法と支那の料理法とを比較するに、日本の食物に、天然物を其儘食ふ物多く、人間の手を経たるもの甚だ少し、支那の食物は日本よりの幾分か進歩して、人造食品多く、腸胃を過勞せしめざるなり、又衣服の如きも昔時の獸皮木葉を着たるも、今日の能く寒熱の度を計り之に適應するものを製するに至れり、その他百般便益なる器械の發明せらる、も皆これ人間生存上の必要に出ざるはなし、尙一步進んで、己が生存に妨害あるもの、悉く之を逐拂ふなど、生命保存の道の次第に精密に赴くなり、今日我儕が協力同心して支持せる政府なるものも、其大目的如何と問へば、要唯我儕が生存の爲に外ならむ、即ち立法、行政、司法の三大權の基本の國家の平安を維持す

爲保持安寧
建設政府者

戰爭爲生存而已

獨立人民而後能成獨立國家

有個人而後有此國家

個人有性格國家豈無性格哉

るの点にあり、又時として、戦争ありて幾万の人命を損する
とあるも、是亦生存上の必要に出るなり、即ち、己を害するもの
を去りて、己を保つものなり、されば、人間がかの心思を働いて
人間の道を発見し、其處に決意し、其屹然として獨立したる人
間が集合して、始めて鞏固なる國家なるもの出で、來る故に、一
人一箇の性格の實に國家の性格に關す、或論者の國家ありて
後個人ありとするも、我の個人ありて後國家ありと信ぜ、固よ
り、國家との個人集合の團體を云ふものなれば、國家と個人と
の相連結して分るべからざるものなり、而して又政府の如き
も、論者によりて人造物とするものあり、然れども政府の本
源たる決して人造物にあらざり、人間の人間たる性格上自然
此物なかる可らざるによるものなり、蓋し一個人に性格ある
如く、一國にも亦性格あり、一國既に性格あれば、之を發表する

政府乃代表國家性格

所の器關なかるべからざり、然して其性格を發表する所の器關
の實に一國の輿論即ち國是を援き取るところの政府にして、
この輿論の法律となる、而して其立法官に於て成りたる法律
を行ふもの、之を行政官と云ひ、其をして障害なからしむるも
の、之を司法官と云ふ、この三大權の則ち政府を組織するの要
素にして、政府の即ち一國の性格を代表する器關たるなり、若
し此趣意を敷衍して論ぜれば、遂に全世界を打ち丸めて一
の大國家となし、一大政府を創建せざる可らざるに至る、政府
組織の事に就ての尙第三章を參觀せよ、
されば、一個人より社會の組織即ち所謂人間世界が出來たる
の全く人間生存の爲めなると明かなり、故に人間の此世に在
て生存の爲め、眞面目の動作を爲すは、人間の職分と云べく、又
人間踏むべきの道理と云ふべし、而してその人間の生存する

萬物一致

や職分あり、道理ありとの之を何に由て明にするやと云ふに、他なし、即ち人間の人間たる「想考」すると云ふの點に由て之を講究し、而して万物の理と人間の心と全く一致して始めて此生存が「道」なりとのと判然たるに至るなり、

第三 國家之腦髓

凡そ天地間の事物に、一定の道理を具有して、決して動かすべからざるものあり、試に看よ、雨露の降下して水となり、水の蒸發して又雨露となるが如き、草木の地味を吸収して繁茂生長し、而る後ち枯凋搖落して、又地味を肥すが如き、又人間が七十二原素の抱合に依て身体備はり、生長發達命數極りて死し、分散して元の原素に歸するが如き、其他天地間の元素の、或は禽獸となり、魚鳥草木となり、各異に其形体を具備するも、其枯死するに方りて、元の原素となり、新陳代謝して盡る時なき

原業者粹然
塞于天地間

國家腦髓縱
令有消長千
古不滅

人有靈妙智
能

長短相補以
社會結合成
矣此是天理

なり、總て原素の形体の有無に拘はらる粹然として、天地の間に活動するものなり、國家の眞理も亦この道理にして、其形体の有無に拘はらる、其腦髓の終始不滅のものなり、抑も人類の草木禽獸魚鼈介蟲等の如き他の生物と其性を異にし、靈妙な長知良能を具へ、其能力を發達して能く天に勝ち、天造の物を取て自己の需用に供し、以て生命を保全し、以て自由を享受すのものなり、然るに一人の能力の一人だけの分量ありて、充分に心身の満足を得る能はる、且つ其面の異なる如く、人々の好尚、情思、智能等も亦同じからる、彼に長るものあれば、此に精さるものあり、故に數人相集りて社會なるものを組成するに至れり、それ社會なるもの、本元天理に出たるものにして、人間の孤身獨居して生命と自由を全ふすべきものにあらず、かく云はれ、或は孤身獨居してこそ、人間の自由なるべけれと言

不有社會乎
世界不過一
彈子

ふものなきにあらざるべし、成程人間が無人島の如き處に獨居せば、身体の動作の自由自在なるべけれども、言語を以て意思を通じ、智識を開くの道なきにより、其衣食住を始め、心思の娛樂の頗る不充分にして、人間固有の情態を發達せしむるに由なからん、左れば人々が滋味を食し、美服を着し、宏壯なる樓閣に住み、數万金の富を有し、貴重の生命と自由とを保全し、安全幸福の域に歡娛せんと欲せば、必らむや社會の組織結合なるものなかるべからむ、何んとなれば一人限りあるの能力を以て、此等の境域に達すべきものにあらず、數人の能力を交換合併し、彼に長むるものあり、此に精き者ありてこそ、始めて右の境域に達すべけれ、のなり、此の如くにして始めて天理に隨へるものと云べし、若し社會の組織結合なくば、世界はたゞ一の彈子土塊に過ぎざるなり、故を以て人智の進歩に隨ひ、愈々

有人此有社會
有國家有政府
此有國家有政府

益々社會の結合の親密に赴き人々互に一身同体の思をなし、深く利害休戚を感ずるに至る、於是乎國家の基礎立つなり、かく國家の基礎立つに至れば、公共の事業の隨て繁多となり、此に政府の要起る而して河川堤防道路を修繕し、又の新に之を開通築造し、或の學校を興し、人才の教育を謀り、或の海陸運輸の便を開き、又の弘く衛生の事を計るなど、種々雑多の事業も亦た從つて起る、於是乎政府の用も亦甚だ繁雜なり、抑も國家全体に關する事業の國家全体に於て負擔せざるべからむ、そは如何と云ふに凡そ人間の事業に一人若くの數人の事業と、國家全体の事業との區別あり、國家全体の事業の一人若くの僅々數人を以て爲すべからむ、又一人若くの數人の事業の國家全体を以て爲すべきに非ず、譬へば一人の力を以て揚ぐべからざる巨石の、万人の力を用れ、容易に揚るを得べし、此

所關國家全
體事業則於
國家全體宜
負荷之

個人的事業
國家的事業
負荷各異矣

の如き多數の合力に頼るべきものなり、又一人の力を以て容易に持行き得べき提燈を万人の力を以て持行かんとするの無用の事と云べし、個人的の事業と國家的の事業の差異の實に此類なり、

國家要其國
家体格智能

尙日國家全体の事業なるものを論せんに、抑も國家全体の事業との取も直さき國家全体を支配する上に付ての務を云なり、然るに縦合ひ人智進歩して、國家全体の管理上に許多の手数を要せきとするも、既に一体一個の体格を具へ、智能を具、有したるものが、集合せるものなれば、其集合せる國家に於ても亦自ら國家の体格智能なかるべからき、總て國家の一人一個の体格より成立ち、牽制力によりて團結するものなれば、又人體の如く其体格智能あるの事物自然の道理に出たるものと云はざるべからき、是を以て一人若くは數人の權力を以て國

政權人權之
甄別

真正之政府
是國家之腦

家全体の權力を侵さんとするも、亦決して得べきものにあらず、猶ほ人力を以て地球の運行を停止すべからざるが如く、猶ほ地球の運轉力を以て人類を押壓すべからざるが如し、斯の如く國家全体と一人一個との權限の分る、所の乃ち政權と人權との區別ある所以にして、國家全体の智能を、集結したる所、乃ち國家全体の腦力の鍾まる所、之を真正の政府と云ふ、即ち國家の腦髓是れなり、故に一人一個の腦力の則ち一人一個を支配し、國家全体の腦力の則ち國家全体を支配す、其之を支配するに付ての事務を稱して真正の政事と云ふなり、政府なるもの、果して上に論せる如くなりとせば、彼の宏壯なる樓閣夥多の役員を備列したる場所を指して、直に政府と云ふべからき、その樓閣を構造し、役員を備列したるもの、則ち政府の皮相にして、其精神の國家全体の腦力に存し、萬

國家腦力乃
出於天理

古○不○易○千○載○不○滅○の○天○理○に○出○で○た○る○の○と○云○さ○る○を○得○せ○然○る
に○人○智○の○開○進○せ○さ○る○間○の○其○事○務○も○亦○頗○る○混○雜○し○て○其○大○なる
事○業○の○一○の○會○社○に○於○て○取○扱○ふ○べ○き○部○分○を○も○多○く○の○政○府○に○於
て○辨○理○せ○さ○る○を○得○さ○る○の○場○合○あ○り○然○り○而○て○單○に○國○家○全○体○の
腦○力○と○云○ふ○も○未○だ○其○解○を○盡○さ○さ○る○の○あ○る○べ○け○れ○ば○尙○之○を
左○に○細○言○す○べ○し○

眞成輿論乃
是政府精神
乃國家腦髓

夫○れ○一○人○一○個○の○智○能○の○集○合○し○て○國○家○全○体○の○智○能○と○な○り○其○智
能○の○主○管○者○た○る○腦○力○の○發○表○す○る○所○乃○ち○之○を○眞○成○の○輿○論○と○云
ふ○此○輿○論○の○あ○る○所○の○取○り○も○直○さ○き○政○府○の○精○神○乃○ち○國○家○の○腦
髓○に○し○て○輿○論○を○外○に○し○て○政○府○の○精○神○た○る○の○の○復○た○あ○ら○せ
是○を○以○て○彼○の○政○府○の○皮○相○が○其○時○代○の○輿○論○を○措○て○政○事○を○爲○ん
ど○す○る○も○決○し○て○爲○し○得○べ○か○ら○せ○若○し○輿○論○を○措○て○政○事○を○爲○す
の○の○あ○り○と○云○は○ゞ○是○れ○政○事○を○爲○す○の○の○に○は○あ○ら○せ○何○と○な○れ

眞成人權不
得眞成
政權眞成
眞成人權
眞成人權
眞成人權

バ○そ○の○政○府○が○人○民○を○壓○制○し○て○民○權○を○侵○す○と○あ○り○と○云○ひ○或○の
人○民○が○跋○扈○し○て○政○權○を○凌○辱○す○と○云○ふ○の○畢○竟○其○政○府○の○壓○制
の○眞○成○政○府○の○壓○制○に○あ○ら○せ○た○ゞ○政○府○の○皮○相○に○身○を○寄○せ○た○る
暴○君○汚○吏○が○壓○制○す○る○の○の○と○云○さ○る○べ○か○ら○せ○又○人○民○が○政○府○の
權○限○を○犯○越○す○と○云○ふ○も○決○し○て○人○民○が○眞○成○政○府○の○權○限○を○凌
ぐ○と○云○ふ○に○の○あ○ら○せ○政○府○の○皮○相○に○身○を○寄○た○る○暴○君○汚○吏○が○已
が○勝○手○に○定○め○た○る○權○限○の○分○界○を○他○の○人○民○が○犯○越○し○た○る○ま○で
の○の○な○れ○ば○な○り○是○れ○其○一○人○一○個○の○權○力○と○國○家○全○体○の○權○力○と
自○ら○區○別○の○判○然○た○る○の○の○あ○る○を○以○て○の○故○な○り○然○ら○ば○眞○成○の
民○權○の○眞○成○の○政○權○を○以○て○侵○す○べ○か○ら○せ○眞○成○の○政○權○の○眞○成○の
民○權○を○以○て○凌○く○べ○か○ら○せ○互○に○之○を○侵○凌○せ○ん○と○す○る○も○侵
凌○す○る○を○得○さ○る○な○り○此○の○如○く○な○れ○ば○如○何○に○人○民○が○智○識○の○程
度○進○む○政○府○た○る○の○の○眞○理○の○天○地○日○月○と○共○に○無○窮○に○炳○然

たるべし

然り而して今一步を退き右に論せる所の政府の眞理の如何なる時代に於ても發表せらるべきや否やを論せんに、固より時代の如何を問はせ、其國家を支配するもの、其國家全体の輿論なり、試みに看よ專制の國と雖も、明君賢相の民の心を以て心となすと云へり、必きや其民心の如何を察し、以て其國を治めたるにあらせや、其民心との、其國中一人一個の心を指すにあらせ、全國一般人民の思想の集團したる所を指たるものなり、專制國既に然り、況んや其他をや、然るに世或の言ん、公論必しも是ならせ、故に公議輿論を以て、其國を治めんとするの、決して得べからざる場合あるべしと、此論者の必きしも是ならせと云ふの、如何なるものを以て是なりとし、如何なるものを以て不是なりとするか、未だ其區別を明かにする能はせと

雖も、畢竟公論も正理に合はざるものありとの謂ならん、成程人智の開けざる間の、人々の腦力不完全なれば、自己が自身を支配する上に於ても、正理に合はざると多々あるべし、故を以て其不完全の腦力を集合したる國家全体の腦力も、亦不完全なるの道理なり、然れば國家全体を支配する上に於て、其正理に合はざるとあるの數の免れざる所なり、然れども是れ其國家の其時代の腦力にして、如何に之を完全ならしめんとするも得べきものにあらず、論者試に一考せよ、英國が往古フリトノ人種の時代に於て、今日英國の政治思想を有せしめんとするも、決して得べからせ、又我國今日有志が主張する民權自由の説も、幕政時代の人民に主張せしめんとするも、亦決して得べからざるの道理ならせや、されば其國家其時代の輿論の其時代に適應したるものにして、縦令ひ正理に合はざるもの多

代興論則適其國家其時

々なりと雖も其國家の腦力乃ち其政府の精神となさざるを得ざるなり猶ほ一個の愚人が其身を修むるに愚かなるが如し是れ實に止むを得ざる所のものなり故に輿論の則ち其時代の如何を問はせ之を政府の精神となさざる可らざるの豈復た觀易きの道理ならせや

國家不可無根軸而國家始

然り而して其公議輿論を發表せんと欲せば乃ち撰擧の良法を布き其國家全体より若干人の代議士を撰擧し以て之を抽き取るより外なかるべし果して然るときは其抽き取りたる所の論議を處理するに於て紛亂錯雜の憂ひも亦た自らなき能はざるなり故に之れが中心力となり支持動かさざるの根軸なかるべからせ是れ上に帝王あり下に人民ある所以にして帝王の上極にあり人民の下極にあり而して人民の代議士と帝王の有司と其中間に立ち遠心力となり政を議決施行し

鞏固矣國家之根軸猶地球之南極北極上極下極屹然不動而後能可使其國也家腦髓完全

且つ新陳交代して恒に活動運轉し政治をして固滯腐敗の弊なからしめ以て國家の安寧を永遠に維持すべきものにして恰も地球の南極北極の根軸により日夜運轉して墜落せざるが如し是を以て其政治の根軸となるべき上極帝王の神聖犯すべからせ下極人民の誠心渝らざる者たらざるべからせ若しそれ活潑なる國家全体の腦力より發動する所の公議輿論を維持する根軸となるべき上極下極にして少しくも動搖するとあらば國家何を以て安泰なるを得んや猶ほ南極北極の動搖すれば地球の安泰を保つ可からざるが如し此の如くにして國家の腦髓始めて完全なるを得べきなり

第四 萬物の進化

人智開進則善闡發萬物理法而人性

人間の智識の漸く進化して天地万物の理と一致するに至るべし野蠻時代の智識と今日十九世紀の智識とを比較すれば

亦與其理法
合同一致也

人間宜使生
存萬有而使
萬有生有自
已

人間我萬有
則自已亦我

人智開明魑
魅走焉魍魎
匿焉

漸々進化し來りて万物の理法に適合するの傾きあるを見る、
例へば電氣を使用して、音信を通じ、空氣又ハ綿を使用して、銃
丸を放ち、水素瓦斯を使用して、風船を遣り、油を使用して、狂瀧
を鎮むるなど、すべての新發明ハ實に枚擧するに遑あらず、此
等の皆人々の智力の發達進化して、万物の理法を探り、其生存
の用に供せるものなり、故に、我儕益々智識を研きて進むとき
ハ、天地間、万有万物たりとも取て以て已の生存を助くるに至
らん、然り而して、天地間の万物も人間の進化に伴ひて皆其生
存の目的に進化するものなり、故に、人の万物をも生存せしめ、
而して自已も生存するの理法に進まざる可らざる、例へば、人、牛
を喰ふ爲めに、牛も生存せしめ、米を喰ふ爲めに、米を生存
せしめ、家を建る爲めに、材木を生存せしめ、衣類を製する爲
めに、綿糸を生存せしむるが如し、すべての物みな人間生存

の爲に生育するものにして、もし人他の万物の生存を害せば、
已も亦生存する能はざるに至る、而して人の生存を障害する
ものハ、人智の進化するに隨ひ、漸次驅除せられて、其迹を絶つ
に至る、何となれば、其人間の本源なる精神を覆ふ所の迷夢ハ、
人智進化して生存の道に近寄るに従ひ、次第に消滅に歸する
ものなれば、其外部に在て障害を興へ居しものも、人智の進歩
と共に、其正体を發見せられ、其毒を逞ふするも、能はざるに至
るべければなり、例へば、堤坊を築くことを知らざる以前の人類
ハ、痛く水害を蒙りしが、堤防を築くことを知りてより、かの洪水
も其力を恣にするも、能はざる、大災を防ぐを知らざる以前の之
が爲に苦むと鮮なからざりしが、防火術備りてより、祝融も其
威力を逞ふするも、能はざるに至れり、彼の地震の如きは未だ
其豫知豫防するも、能はざるといへど、其研究行届きたるとき

天地萬物理
法乃合人間
生存理法

の之を避くるの方法を實行すると得るに至るべし此の如く、
すべて人間に害を加へたるものも人間が生存の道に向つて
進化し來ると共に其害次第に消滅するものなり是れ凡て天
地萬物の理法と人間生存の理法と決して相離るべきものに
あらざる證據なり而してその一時天地萬物が人間に危害損
傷を與ふるが如き觀ありしは唯其人間の智識進まざりて其
理法の一致を發見する能はざりしが故のみ天地萬物の決し
て人間を害するものにあらざるなり今一個人の上より之を
考ふるも亦進化なるものあり幼年より壯年となり壯年より
老年に進むこれ人生の進化なり蓋し人間の肉体の常に新舊
分子交換して變遷窮りなく七年を経れば又舊分子を留めざ
ると云ふ其志想の上に就て云ふも幼年の思想の進化して壯年
の思想となり壯年の思想の進化して老年の思想となるなり

世界萬物一
瞬一轉變化
無窮奇絕妙
絶

進化而生存
焉

而して人の晝間勞作して夜間眠るこれ晝夜の進化なり其人
間肉体の生れて再び塵土に歸するの人間の上に取りて一大
進化なりすべて世界萬物の一瞬一轉變化窮りなし奇又妙と
云ふべし然り而て其進化たるや一も人間生存の爲めにあら
ざるはなし蓋し人の休息の働くが爲めなり人の死するの生
んが爲なりかく云はゞ或の疑團を抱く者あるべしと雖も編
末に至りて自ら釋然すべければこゝに詳論せよ(第七章參看)
たゞ此に一言すべきとあり世の進化論者の中に人の人間の原
と猿猴等の類より進化せりと云ふ是れ蓋し其肉体上より考
へ其骨格舉動等の酷だ類似するより起れるの臆説ならん然
れども唯如何せん猿猴の如きの人間の如き精神なしもし果
して猿に人間の如き精神あらば是れ猿にはあらざり乃ち人なり故
に猿は猿に人間の人間に草の草に木の木に進化するも決して

物超類不得
進化
物役類而進
化是一定不
易法則

若夫物超類
而進化則人
間竟不能生
存

天賜我自由

類を○超○て○他○物○に○進○化○す○る○と○能○ひ○き○是○れ○其○造○化○せ○ら○れ○た○る○根
本○の○差○異○あ○れ○ば○な○り○故○に○物○の○其○類○に○従○ふ○て○進○化○す○る○も○の○に
し○て○是○れ○即○ち○一○定○不○易○の○法○則○な○り○さ○れ○ば○未○だ○山○羊○の○鱈○に○變
化○し○た○る○と○な○く○茄○子○の○種○に○西○瓜○の○生○せ○し○と○な○く○西○瓜○の○蔓○に
茄○子○の○實○を○結○び○し○と○あ○る○を○聞○か○き○若○し○世○に○此○の○如○き○と○あ○り
と○せ○ば○人○間○の○決○し○て○生○存○す○る○と○能○ひ○ざ○る○な○り○何○と○な○れ○ば○一
定○の○法○則○な○さ○を○以○て○な○り○即○ち○人○間○が○米○を○以○て○食○物○と○せ○ん○と
て○之○を○蓄○へ○ん○に○一○夜○の○中○に○俄○か○に○化○し○て○土○と○な○り○又○我○使○用
の○爲○め○に○金○錢○を○貯○へ○ん○に○何○時○か○蛙○子○に○化○す○る○が○如○き○あ○ら○ば
如○何○に○し○て○人○間○の○生○存○を○保○存○す○べ○き○や○畢○竟○今○日○ま○て○世○界○人
類○が○生○存○し○た○る○所○以○の○も○の○の○世○界○萬○物○一○定○不○變○の○法○則○に○よ
り○皆○人○間○の○生○存○に○向○つ○て○進○化○せ○し○が○故○な○り
そ○れ○天○地○萬○物○の○千○差○萬○別○窮○り○な○さ○を○以○て○上○帝○の○人○間○に○與○ふ

萬物万種万
類以能使人
思想且娛樂

る○に○自○由○の○意○思○を○以○て○せ○り○是○れ○其○宇○宙○の○萬○物○を○研○究○し○自○ら
其○宜○さ○に○向○つ○て○進○化○す○る○の○方○向○を○判○定○せ○し○め○ん○が○爲○な○り○若
し○宇○宙○萬○物○同○一○に○し○て○異○同○な○か○ら○ん○に○人○間○の○少○し○も○思○考
す○る○と○な○く○智○識○經○験○も○發○達○成○長○す○る○と○な○け○ん○實○に○こ○の○千○差
萬○別○の○情○態○あ○れ○ば○こ○の○人○間○の○其○想○考○力○の○價○直○あ○り○又○人○間○の
人○間○た○る○職○分○を○盡○し○得○る○な○れ○又○人○間○の○娛○樂○も○此○の○間○に○存○す
る○こ○と○な○れ

第五 天則の普及

今宇宙の森羅萬象を見て我儕人類の情態を考察するとき、
爰に一定不變の法則ありて嚴密に一致するものあるを知る。
たとへば太陽の東より出て西に入るが如き、月に盈るとわれ
ば歛るとあるが如き、又地球の太陽を一年に一回轉し、寒來れ
ば暑往き、花咲く春あれば、木葉を散す秋あり、時に雨降れば其

天則正確顯明不變不滅

水蒸騰して又雨となり、風の空氣の變動によりて起り、水の流動して身きに向つて落ち、鳥にの双翼ありてよく中天を翔り、獸にの四足ありて巧みに地上を走り、魚にの鱗ありて能く水中を遊ぎ、人にの兩足ありてよく萬里の遠さを歩む、實に此等の方法順序の古來具備して毫も變更あるなし、尙一層人間一個の上に就て考ふるに、飲食睡眠運動より、心意の能力を使用するに至るまで、其人の強弱に應じて、其程度自ら定まれり、其心中の至に至りても亦各々方法の備へるありて、即ち情によりて感し、智によりて識別し、意によりて判断し、而して良心ありて義を守り善を行ひ、仁愛ありて己を愛し、人を愛し、以て幸福を得るの土臺となる、此等の皆人に備へるの天則なり、肉体上の事に就ても血液の循環筋絡の屈伸など、皆其動かすべからざるの法則あり、以上概略陳述する所のもの、之を精細

萬物陳謝活動皆有順序乃是此順序乃天則

天地萬物相連鎖以發達

に研究するとき、實に愉々快々なるものなり、天上の事の、天文學、地上の事の、地理學、草木の事の、植物學、禽獸蟲魚の事の、動物學、天然物体の性質運動等の、物理學、人体諸機關の構造の、生理學、心中の事の、心理學、等、凡そ學術の上に就て研究するとき、其研究を加ふるに従ひて、實に奇と云べく妙と稱すべき、一定の法則あるを發見すべし、是れ即ち萬有事物の順序方法にして、萬有事物の此順序方法の爲めに運行するにあらざり、其運行する所のもの、即ち順序方法にして、之を天則といふなり、然り、而て尙一層茲に吾人が最初より説く所の本旨を確かめんか爲に、述ざる可らざるの法則あり、他にあらざり、天地萬物が其一物と他物と關係を有せるとの、是なり、例へば日と月との如く、天と地との如く、風と雨との如く、寒と暑の如く、禽獸蟲魚に雌雄ある如く、人間に男女ある如く、尙は是を細言すれば

優勝劣敗是眞理

太陽の光の月之を受けて暗夜を照し、山の土の漸々川を埋め、其川は又山となり、山又川となる、陸の漸次崩れて海に入れ、海填りて陸となる、雨降れば風吹て晴天となり、風吹ば雨を催し、而して人類及び動植物の雌雄の關係を以て、其繁殖を盛にし、又人類動物の同類相扶持提携して生存せり、又今人間一個の區域に就て考ふるも、肉体と心靈との二者によりて靈妙なる生存をなすを見る顧みて人間全体の上を見れば力の強き者あり、弱き者あり、智識に富る者あり、又愚なる者あり、貧者あれば、富者あり、善人あれば、惡人あり、皆相對の關係を有しつゝ、新陳代謝して進化する所の法則具備せるなり、而して其生存に必要なるもの、相合して其生存に害あるものと相競ふ之に由て自然に競争の勢を生じ、此競争に於て強き者の勝ち、弱き者の敗る之を優勝劣敗と云ふ、之を簡短に云ひ、生存に必要

適種生存

なる關係を有するもの相合して、生存に妨害を爲す者を排撃し、優れる者の勝ち、劣れる者の敗るなり、之を又一に適種生存と云ふ、即ちよく天則に適應したるもの生存すると云ふ、の義なり、故に萬物各々其歩むべき順序方法を誤まるとき、必き生存する能はざるべし、例へば瘠地に麥を播くも、其麥の生存する能は、然れども沃壤に播かるゝとき、よく生存す、その然る所以のもの、沃壤に麥の生存に必要な、燐素、窒素、酸素の類を多量に含めるが故なり、之に反して、瘠地の麥の生存に不適當なる所以、其生存に必要な燐素、窒素、酸素等を欠ぐが故なり、かの獸類の如きも空氣と飲食物が其体に適すると否との因て、其生在すると否らざるとあり、人類に於ても亦然り、其肉体と心靈との法則に適へる營養を得ざれば、決して生存する能は、故に人間社會の上に就て専ら優勝劣

人順道則必勝

敗の道理を云ひ、人間の心身に適合する道を踐み行ふ者、必き勝を制せざることをなしと云ふべきなり、商業の一例に取ても然り、極信切に極正直に、即ち良心の許す所に從て營業せば、其業益々盛大となり、他の不正を働く所の商人を竟に壓倒するを得べし、又製造者にありても、十分力を盡して期日を違へ、過當の價を食らせして、勉勵するとき、他の拙劣にして期日を違へ、貪慾にして工錢を食る者を壓例すべし、世の中、の恰かも、演劇場の如し、善人もあれば、悪人もあり、笑ふ者もあれば、泣く者もあり、喜ぶ者もあれば、悲む者もあり、小兒もあれば、大人もあり、美人もあれば、醜婦もあり、其情態種々雜多にして、始めてこの大活劇場、即ち社會なるものを構成せるなり、たゞ此際我儕の考ふべき、立役たるべきとにして、もし注意せざれば、馬足となりて、終らぬのみ、又一方より云ひ、世の中、の試

人間眞個活劇場

人々所冀在
淨旦而多竟
爲馬脚了可
惜哉

天則之深奧者

驗場に於て、彼の天地間の萬物は、千差萬別、人間の前後左右、上下を圍繞せるものなり、而して人の此間に在て、種々の考を爲へ、自由なる思考力を賦與せられたり、左れば我儕人間の如く、何にして此間に身を處すべきか、他なし、たゞ忍耐と勤勉とを以て、彼の天地萬物及び人間の爲に備はれる天則を見出し、戦々競々として、以て一歩も行路を違へ、進むべきなり、此の如き人こそ、人生の試験に及第して、よく生存の目的を達すべく、又よく優者として、社會に勝つべきなり、何となれば、此天則の人間が生存するの道にして、人間が踏行ふべき順序、方法たれば、なり、尙同一言すべきこと、彼の迅雷烈風の如き、大地震の如き、暴雨洪水の如き、凡俗の眼より之を見る時、天則との云ひが、たさむ子細に之を研究すれば、各々其理の存するあり、且つ大に人をして、警發奮せしむるところあり、て必

ら○天○則○の○外○に○出○で○さ○る○を○知○る○を○得○べ○し○是○れ○尙○は○人○間○に○病
な○け○れ○ば○衛○生○の○法○全○き○を○得○さ○る○と○同○一○理○な○ら○ん○凡○て○宇○宙○間
の○こ○と○變○幻○不○可○思○議○の○こ○と○き○も○の○あ○り○人○天○則○に○隨○へ○ば○活○潑
々○地○に○運○動○し○自○ら○俗○眼○の○端○倪○す○べ○か○ら○さ○る○も○の○あ○る○べ○し○

第六 善惡の岐路

上○に○論○じ○た○る○所○の○天○則○な○る○も○の○ハ○則○ち○一○と○一○と○を○合○し○て○二
と○な○り○二○と○二○と○を○合○す○れ○ば○四○と○な○る○と○云○ふ○が○如○く○又○直○線○ハ
常○に○直○線○に○し○て○曲○線○ハ○初○よ○り○曲○線○な○る○が○如○く○如○何○に○し○て○も
一○定○不○變○動○か○す○可○ら○さ○る○所○の○も○の○な○り○其○法○則○ハ○万○物○有○せ○ざ
る○も○の○な○く○萬○物○ハ○此○法○則○に○よ○り○て○活○動○せ○る○も○の○な○り○乃○ち○人
間○も○其○精○神○よ○り○肉○体○に○至○る○ま○で○皆○此○一○定○動○か○す○べ○か○ら○さ○る
法○則○あ○り○人○ハ○此○法○則○に○よ○り○て○生○存○す○る○も○の○な○り○此○法○則○ハ○眞
實○に○し○て○決○し○て○之○を○欺○く○べ○か○ら○さ○る○も○の○な○り○即○ち○二○ハ○二○と

以數理明天
天理

天則則實也
誠也

天則之外無
天則

合○し○て○五○と○な○ら○さ○る○が○如○く○又○直○線○の○如○何○に○し○て○も○曲○線○と○な
ら○さ○る○が○如○し○故○に○万○物○ハ○固○よ○り○此○方○法○規○則○を○外○る○ハ○が○如○き
と○な○し○万○物○が○此○方○法○規○則○に○よ○り○て○存○在○す○る○ハ○即○ち○事○實○な○り
誠○な○り○是○を○以○て○天○則○ハ○天○則○の○外○に○天○則○な○さ○を○知○る○べ○し○例○へ
ば○二○と○二○と○を○合○し○て○五○と○す○る○の○虚○ハ○出○來○さ○る○な○り○直○線○を○曲
線○と○す○る○の○虚○も○出○來○さ○る○な○り○故○に○人○間○も○其○先○々○よ○り○備○ハ○り
た○る○處○の○心○理○よ○り○肉○体○の○外○に○至○る○ま○で○綿○密○に○備○は○り○居○る○所
の○法○則○に○從○て○運○行○せ○せ○ん○ハ○あ○る○べ○か○ら○さ○り○然○り○と○雖○も○人○間○は
か○の○智○覺○力○或○は○撰○擇○力○の○如○き○實○に○其○思○考○の○廣○大○無○邊○自○由○自
在○な○る○權○を○與○へ○ら○れ○た○る○も○の○に○し○て○其○自○由○な○る○が○爲○に○其○撰
ぶ○所○を○誤○り○其○法○則○の○外○に○逸○す○る○と○な○さ○に○あ○ら○さ○り○然○る○に○右○に
論○じ○る○如○く○法○則○の○一○定○す○る○あ○る○を○以○て○人○間○は○此○法○則○の○外○に
逸○す○る○と○決○し○て○無○き○筈○な○り○と○思○は○る○ハ○と○い○へ○ど○も○是○れ○乃○ち

人間の人間たる所以にして他の萬物の有せざる所の精神なるものあり而して其支配の下にの智識の如き、意思の如き、種々なるものあり、爲めに其精神の誘惑を來すの具も亦多きが故に一步を過る時の其法則の外に逸することあるなり、されども人間が其精神を以て能く万物を支配し、其所を得せしめんのに、一も天則に違背する所の万物なかるべし、例へば、國を治むる帝王に相當の權利を與へたりと同一理なり、若し帝王にして果して善良の帝王たらば、其權力を適當に用ひて、國家安全なるも、若し不良の君主なれば、其權力を恣にし、國家擾亂して人民塗炭の中に陥らんのみ、故に人が自己に備はりたる所の天則を誤らざして、之を正當に行ふの、即ち人の人たる所以の道を歩むものにして、是れ即ち善人にして、万物も其所を得るなり、之に反して其考足らざして、自由の撰擇力を以て其

履行人道則
是善人逸於
人道之外則
是惡人

善人則生存
而優勝惡人
則死滅而劣
敗

撰ぶ所を誤り、一步たりとも天則の外に逸せば、是即ち惡人にして、万物も其所を得ざるなり、抑も此天則に従て行ふもの眞の心を欺かざる善人にして、能く生存して優勝劣敗の世の中に勝を占むるを得、此天則を外れたるもの、罪惡の人に於て死滅の方向に奔るものなり、是を劣敗の人と云ふ、例へば蒸氣車の軌道ありて運行するものなり、若し軌道を外るゝとき、蒸氣車たるの働さを爲さざれば、故に軌道に由りて始めて蒸氣車たるの價を有するなり、若し誤て軌道の外に馳せ出でなば、必き顛覆して或の破壊するとあるべし、故に人の其務むる所、官吏、商賈、學校教員、府縣會議員、國會議員、農業家、漁業家、金貸、航海者、等何種の業を問ひ、すべて眞の心を以て、其業に勵むべき、其人の必き相應に生活するを得、人にの敬せられ、賞せられ、又よく信用せらるゝに至る、之に反して、己を欺き、人を欺き、

不眞實にして、其執る所の業に勵むとなくば、必ず他人より擯斥せられ、嫌惡せられ、遂に獨立するを能はざるに至る。故に天則に従ふもの、其身常に榮へ、其心にも亦常に大なる喜を感すべし。之に反するものは、其身常に苦しみ、其心亦甚しき苦痛を感じべし。世に天則に従はざるもの、即ち天則を發見する能はざる者あり、故に其天則に従ふ所の善人の善行の益々貴く、光輝くべし。善人の善行益々光輝くが故に、一方惡人の惡行の益々卑く、益々醜く、益々惡むべきものとなる。然れども、此善惡の名稱たる、唯其天則に従ふと否とに由て名けたるものに、して、或は此善惡に就き、兩道あるが如く論ぜる者あるも、道なるもの、彼の天則唯一のみ、更に他にあるとなし、故に天則に適したるを善と云ひ、背きたるを惡と名く、善惡の岐路實に此にあり、この二と二と合して五となる能はざる、直線の何時ま

道者一而已
順其道謂之
善悖其道謂
之惡是善惡
岐處

上天法律則
賞罰分明
毫髮無遺

でも曲線と異ると、同一理にして、天則の外に、又眞正の道なるものあることなし、是れ恰も孝行者が政府より賞せられ、惡人が裁判所にて罰せらるゝと同一理なり。善人の榮ふるの、即ち賞せらるゝなり、惡人の自滅するの罰せらるゝなり、猶進んで云は、吾人が善行をなして常に心に無限の快樂を得て、安心するは、是心靈上に屬せる賞與にして、又惡人が常に惡き行を爲して、其心に苦痛を覺ふるは、是亦心靈上に屬せる罰なりとす。此の如く、其天則に従順するもの、賞與を得、天則に背戻するもの、責罰を得と云ふは、實に動かすべからざる道理にして、其賞罰の決して誤ることなし、何となれば、彼の天則なるもの、眞にして欺かざるものなれば、其賞罰に於ても罰すべきものを賞し、賞すべきものを罰する如き、間違あることなし、此天則なるもの、即ち上帝の布置する所にして、其賞罰も亦上

人為法三大
權乃是天法
流末

帝の司る所なり、是恰も一國の政事に、立法、行政、司法の三大權
力あるが如し、かの天則の周到緻密なるの政府法律の完具せ
ると異ならず、其萬物が天則によりて新陳代謝よく活動し、よ
く生存して、止まざるの、行政の宜を得と一般にして、其賞罰の
嚴重なるの、司法の能く整頓せると同一道理なり、此の如く賞
罰の備へれるを以て、我儕人間たるもの、其天則に従て賞與
を受け、喜んで生存するを得べし、是實に我儕人間の希望なり、
目的なり、又天則を踏み外して罰せらるゝの實に恐るべきの
結果を生ぜ、豈に深く戒めざる可んや、されど人間の一且其選
ぶ所を誤りて、天則の外に奔りしより、古來其習慣を遺傳せり
是所謂罪惡なるものにして、此罪惡の恰も不攝生者が身体を傷
ひて難治の痼疾となれるか如く、容易に根治すべきものにあ
らず、苟も人この痼疾の罪惡より脱れんと欲せば、早く其天則

惡意惡行人
間之痼疾非
經其所由來
之年處不能
療之

の正道に歸り、而して子々孫々善を行ひ、漸次之を消滅するこ
とを勉むべし、大患痼疾の一朝一夕に治すべきにあらず、如何
に治療を加ふるも、必き其病の來る處の年數を經過せされば、
決して本復すること能はざるなり、故に我儕の唯其天則即ち
人道を守りて罪惡を貳ひせざることを心掛くべし、さなくば
到底生存の目的を達すること能はざるなり、

第七 良心の監識

以上諸章にて、人間の人間たる所以、及び天則進化、罪惡等
とを論したり、是よりの進んで、人間の其心理的作用に属する
天則の大体を説明せん、とす、
(肉体上の天則の、即ち生理なる
を以て、こゝに委しく論せむ)
抑も人間が生存せる生命の根本なる精神の事、之を後に譲
り、其精神の下に位する所の良心より説くべし、之を説くに
先づ其順序及び連絡等を説かざるべからず、蓋し良心の諸官

智情意三者

孔子所謂智
仁勇是也

五十

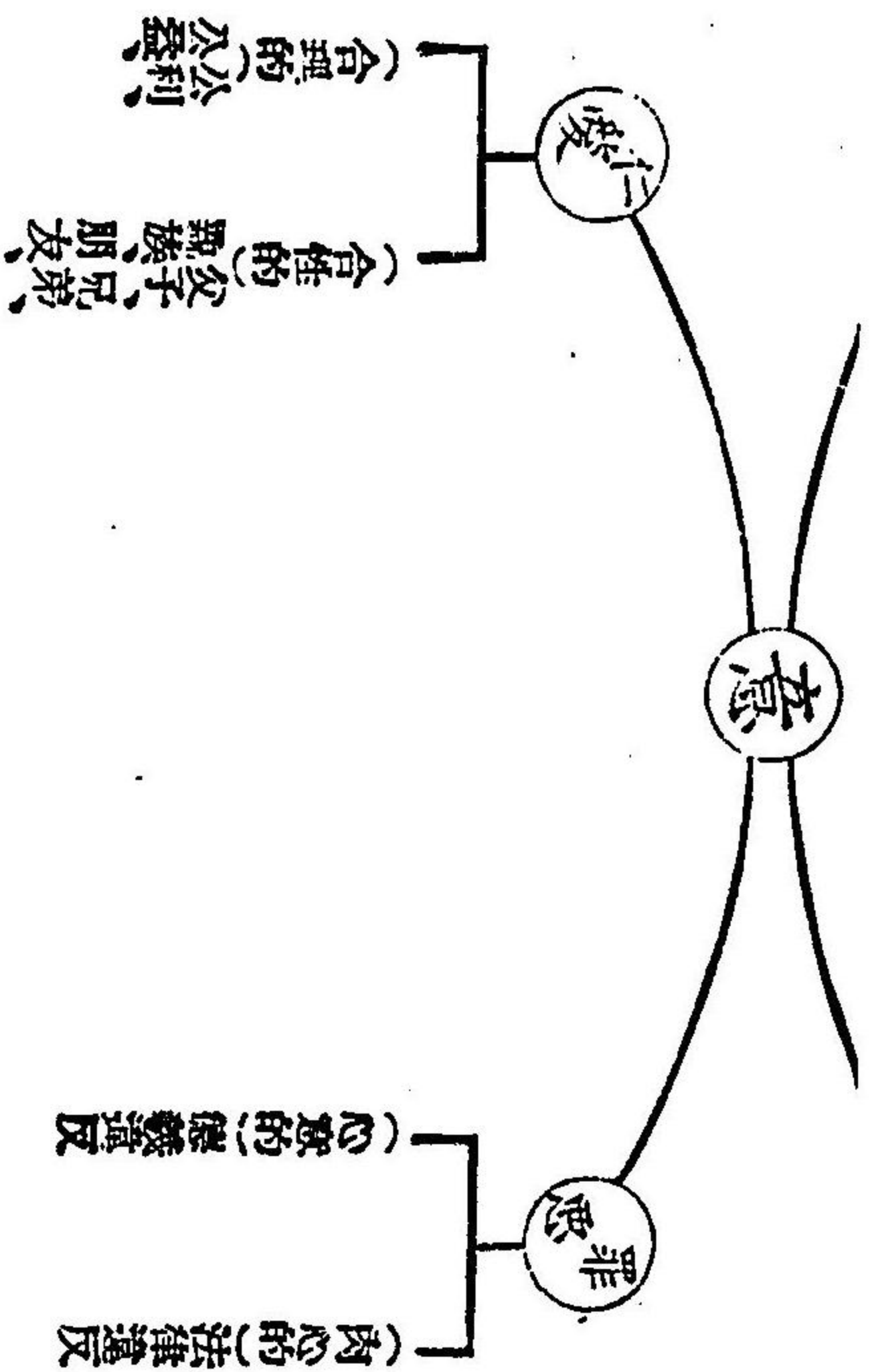
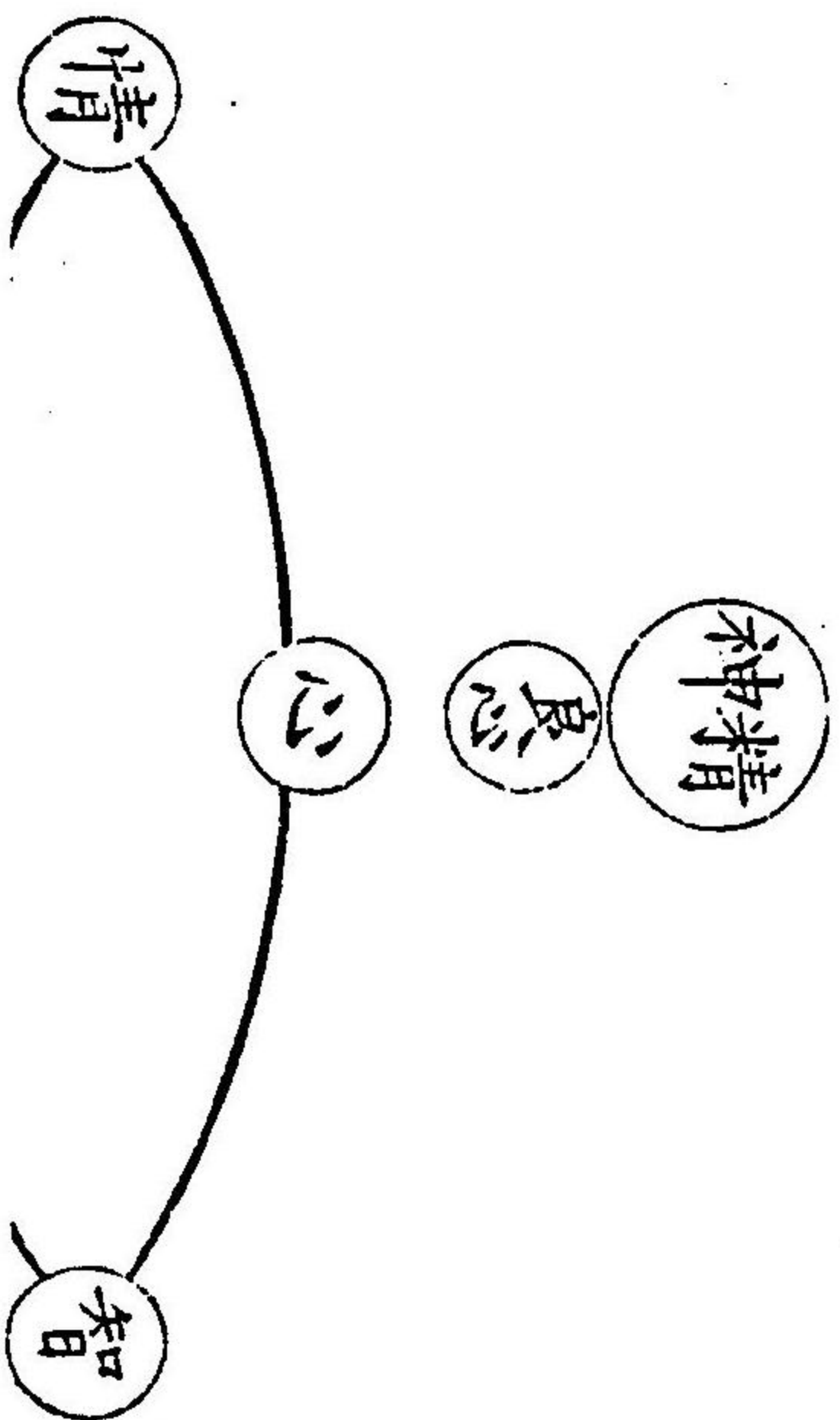
能の支配者にして、其下に心あり、是より智情意の三の者出づ。此三の者の心の働さに取て實に必要なるものにして、物質に長高厚の三性あると同一なり、故を以て人にして、若し此三能力中其一を欠かば竟に完全なる人と云ふべからず、夫れ智と心の心が物の性質や道理等を知るものにして、即ち知覺、記憶、辨別、等の働さを爲ものなり、例へば人間が其生涯の目的とする所の幸福、義務、責任、等のあるを認識するに、此智なるものを必要とす、若し智なくば此等を識こと能はざるなり、情と苦痛、快樂、幸福、過失、等を感じるの能力なり、例へば苦樂、邪正、善惡等の道義の觀念、此情の働さを以て誘起するなり、若し此情なるものなかりせば、人の道義の念を起すことなかるべし、意と智を以て辨別したる所のものを、孰れに定めて可なるやを、決斷するものにて、即ち所謂選擇力なり、此意の最も重要な

智知之情感
之意決之

ものにて人間の最大希望、即ち幸福を得んとせば、この能力に由らざるべからず、乃ち知るの智にして、如此あれば實に福なりと感ぜるの情なり、而してその福に達せざる可らざると決斷するの意なり、而して此意なるもの、其選擇自由なるが故に或は其人果して人間の道に進むか、將た邪徑に迷ひ込むか、其岐路の間に立てるものなり、故に所謂人の責任なるもの、此意の選擇如何に歸するものなり、而して其天則、即ち道即ち生命によりて進むと云ふこと、是れ人間の義務なり、義務なるもの、斯くせざれば能ざるもの、即ち人間の必を服従すべきものを云ふなり、而してその意が責任を全ふし、其道を具一文字に進み、最大目的に達すべき義務を果さんとするに至りては、是によりて徳なるものを生じ來る、世の人之を稱して善行又の徳行と云ふ、此徳行の中に最も其總主宰たる仁愛

五十一

なり、此仁愛の下に、公義、慈悲、誠實、柔順、溫和、謹慎、剛毅、克己、信仰、聖潔等を包含す、而て其仁愛に、合性的の愛と合理的の愛との別あり、合性的の愛と、即ち父子、兄弟、親族、朋友等の關係より起るものを云ひ、合理的の愛と、公利公益に關するものを云ふ、今讀者の了解に便にせんか爲めに左に、圖系を以て心理作用の關係を示さん。



此順序は人間心理の法則にして、若し智の働さと情の働さが肉慾の爲めに制せられ、意の力微弱にして、肉慾に傾き行ひ、人の大事の責任を打忘れ、義務を蔑視して、天則の外に奔馳す、其時、すでに罪人となり、悪人となる、即ち其行ふ所の徳行に反せるものにて、淫亂、放蕩、窃盜、争鬭、不孝、不慈、不忠、不義、不虔、詭譎

良心能監察
諸能而就中
其視力要洞
看意之集中

一時善行非
真正善行

意謹受良心
之指揮以着
之斷決而所

顯之善行謂
之眞善行

自心中搜出
眞正良心

人無生死權
故自己非自
己之有

驕奢兇殺怨恨復讐等を含めり、故にこの本体の良心の監察の常。に。諸。能。に。行。き。届。か。さ。る。可。ら。ず。殊。に。其。眼。光。意。の。上。に。注。が。さ。る。べ。か。ら。ず。この良心の目若し情慾の爲め即ち肉体の慾の爲に。眠。ま。さ。る。こと。あ。ら。ば。良心の意の監督者たる任を失し、意の情慾に驅れたる痴情に逼られて、遂に選擇を誤り全く肉慾の奴隸となり畢る。故に良心の目の常に明かならざるべからず。此の如き關係なるを以て、唯偶然に一時の感情若くは其土地の習慣等によりて、或は貧民に施與し、或は父母兄弟を敬する。と。て。これ。一時の善行に過ざれば、眞の善行と云ふ可らざり。か。の。盜。賊。の。如。き。もの。に。て。も。時。に。或。は。人。に。施。與。を。な。す。こと。あり。又兇殺を行ふ悪人にて、時によりては人命を助くることあり。必。ず。其。良心の極處の感想を受けて、發する所の善行にあらざるより、未だ道に適へるものとの云ふべからざるなり。果

して然らば我儕が此生存の目的を達せんとするに、眞正の良心の在處を確め置ざれば、能はざる。之を確めんには如何して可なるか、即ち良心をして、常に諸能を支配せしむるに、如何して宜さか、是も亦上帝より命せられたる所の法則によりて之を判定せざる可らざる。之を判定するに、即ち先づ我身体の誰れが物なるやを知を要す、抑も我儕の自ら此世に生れ出たるが否決して自己の力に由て生れたるに非ず、唯上帝に由て造られて此世に置れたるなり、世人多くの之れを自然と云ふ自然を一に天然といふ天との即ち上帝の謂ひのみ、然る上の己の身体は己の所有にあらざる。若し之を己が所有なりとせば、是れ實に肉慾の支配を受くるものなり、故に我儕自己を己の所有となさず、上帝の所有なりと覺悟すべし、最實に克己復禮なり、換言すれば己を殺して己を活する妙法なり、此の如く

克己復禮

人境俱奪之
此妙法乃在于

して始めて我良心上帝よりの力を得て真正なる一点私なき良心となるべし。この真正の良心が諸能を監督するときの既に肉体の我の我が有にあらざると云ふに信ぜるが故に、其肉慾横行して良心に眩ますが如きことなし。肉慾の唯天則即ち生理的法则の區域に働き常に良心の制御を受るなり、而して始めて我儕生存の道に進むを得、また罪惡の中に陥入することなし、然り而して猶良心と肉体に必要なもの其二者の養ひ方なり、凡て生る物何にても滋養を與へざれば進化の理法によりて決して生長發育することなし、即ち肉体を養ふは其肉体を組織せる物質を培養するの理なれば其肉体の缺乏を補ふ所の物質を供給せざる可らざ、即ち其人体に適する良好の飲食物を用ひ且つ之を消化滋養せしむる爲に手足身體の運動を盛んにし、又眼耳鼻口鼻等の如きも常に其使用に注意せざ

養身體以道
養心靈以道

人頃長壽不

る可らざ、是即ち肉体の養ひ方なり、而して其心に屬せる養ひ方の如何と云ふに、即ちかの道を踏み行ふを云ふなり、かくすれば其義務を果すに由て總ての官能正當に働き、各其職分を盡し、其總主宰なる良心の常に安然として喜へるなり、是即ち心靈の養ひ方なり、語を換て言ひ、多くの善行をなして其良心を喜ばしむること、心中の何よりの培養法なり、此の如くなれば心身共に始めて健康にして肉体の其生れ得たる所の命の在ん限り精神の永遠不朽に生存して始めて最大幸福の目的を達するを得べし、又人間の此世にありての成るべく長命を保たざるべからざ、何となれば其目的を達する爲に所謂公利公益を謀らざるべからざ、其大なる公利公益に關する事業の僅々たる年月の敢て能すべきにあらざればなり、即ち之を考ふるに、幾多の日月を費し、之を試験するに、又幾多の日月

然不能大公
利公益

を、要し、之を組織するに、も亦た幾多の日月なかる可らざれば、若し此重大なる事業を爲すの、人にして短命ならば、假令之を後より受る者あるも、後戻りするの道理なり、故に人衛生に注意して、其天命を全ふるとき、所謂其生存の目的の達せられ、子々孫々漸次健康なる長命者となり、而て良性質を遺傳して、愈々大なる公利公益を務むるに至る、若し此道を踏み違へて罪惡に陥るとき、健康を害し、事業も妨げられ、子々孫々をも續くこと能はざれば、假令子孫ありと雖も、軟弱にして何の用にも立たざれば、次第に消滅の方向に進み行くべし、而して尙茲に一言せざるべからざる、人の時と場合によりて、其肉体に非常の困難を來すことあり、此場合に於て、彼の良心の支配によりて、意の既に定めたる所の最大幸福を誤らざる様判決せざる可らざれば、即ち公利公益の爲に己れの財産の固より己の生命を

行道者長其
命離其道者
短其命

爲忠義殺身
爲仁愛

忠臣義士精
神凛々乎千
古不死

不忠不義人
保有歲壽其
精神既死矣

最大幸福

も擲たざる可らざることあり、或は忠義の爲に身を殺し、或は仁愛の爲に身を犠牲に供すべきことあり、此状態の或は生存の目的に違ふが如く思へる、其實然らざれば、是も亦生存の爲に外ならず、何となれば真正の命の天則なり、道なり、此の道に従て良心を欺かざるが、即ち生るなり、たとひ其肉体の斃るゝも、其精神の快活するなり、即ち仁人義士の行の數千年の後までも、人々之を傳稱咀嚼し、凛々乎として、其生氣能く人を感化聳動せり、之に反して不忠不義の人たると、ひ百歳の壽を保つも、其精神の死せるものなり、何となればかゝる惡人の行爲は、當世の固より後世の人にまで、痛く擯斥せられて、人をして厭惡せしむればなり、故に道に明かなるの士は、其良心を曲げて生命を保たんより、寧ろ肉体を殺すも良心の是とする所に従ひ、之れを以て最大の幸福として満足するなり、是れ其人に

既に肉体の己が所有にあらざれば、我の全く上帝の有、即ち道に支配せらるゝ者との觀念あるが故なり、此の如くなれば、人の其正道の爲に身を殺すの決して生存の道より外れたる事にあらず、否、反つて生存の目的を達するものと云ふべし、猶之を再言すれば、其公利公益の如何にして、此の世界に普く行われざれば、多くの人類の生存を助くること能はざるが故に、少數の己れを殺して多數の同胞人類を生かしむると言ふの理なり、たとひ其事業のならざるとするも、人の其生存の目的を變ふべきものにあらざれば、たとへば學生が國家の爲に力を盡さんとするに當り、學問して智識を磨かんと思ふも、家貧にして學資なし、然らば其國家の爲めに盡すの手段出來ざるとして、其目的を變すべきか、出來ざれば出來るの時を待つべし、其志を變すべからざるなり、故に必至の場合に於て所謂身を殺して仁を爲

すと云ふこと、其仁なるものが、果して多くの人に利益するや否を確かむること能はざる場合もあるべし、然れども良心を欺きて志を變ざるが如きことのあるべからざるなり、總て其良心の支配に従はざるもの、其道を踏み外したるものにて、よし其肉体の生存するも、其實死せるものなり、肉体死するも、良心を欺かざれば、毫も遺憾のことなく、宛も生存せるに異らざり、即ち其生存せるを以て、其人の心に快然として満足を得、幸福を得、凛々たる精神の、千歳の後を貫きて、活動しつゝあるあり、此に至れば、其精神の本原の勢力に歸するにて、決して無味枯澗なるものにはあらざるなり、

第八 精神の靈活

前既に良心の事を説しが、今尙進んで良心の本源を明にすべし、其良心の基く所の實に靈妙にして、之を名けて精神と云ふ

唯物論者指
精神謂腦髓
活動

物質原因結
物質果靈原
因結靈妙果

この精神の何處より來れるか、我儕が切に思慮を費すべき所なり、唯物論者の、みな精神の腦髓の働きなりと云ふ、成程一寸と考ふるとき、其說一理あるが如し、かの時計が種々の機械より成立ち、獨り動きて時間を知らしむが如く思ふ人、然れどもこれたゞ見たるまでの考にて、淺見の甚だしきものなり、それ物にハ必老原因と結果とあり、されば物質の原因ハ必老物質的の結果を生じ、靈の原因ハ必老靈の結果を生じ、物質の原因にして靈の結果を生じ、靈の原因にして物質の結果を生むものハ決してあらざるなり、故に今其肉体の機關より精神なるものハ働き起るとせば、全く原因に包含せざる結果を生むるものと云ざるべから老是れ大なる間違なり、精神の原因ハ決して物質的腦髓の働きにあらざるなり、蓋し初め先づ精神あり、肉体の構造せらるゝと共に合して、初めて人

以電機譬說
精神活動

以時辰儀臂
再說精神活
動

間となる、是の故に精神の發動する本源ハ、肉体の前にありと云ハざるべから老、例へば電氣ありて然る後電信機始めて音信を千里に通むるが如し、即ち精神の働きをなすが爲めに、肉体なる諸機關備付られたる道理にして、其電信の器械能く具備せば、其電報ハ少しの誤りなく、能く音信を達するを得るなり、然れども若し電信器械にして不完全なるか、或ハ電線切斷又ハ混線するときハ、如何に熟練の技手といへども、音信を通むるに由しなかるべし、然らば肉体不具なる人、若しくハ柔弱なる人ハ、充分智識を磨きて、其精神の働きを世に顯ハすを得ざるなり、今時計が組立られてあるより自然動く如く思ハるゝも、決して組立られたるによりて動くにハあら老、組立らるゝ前、活動すべき彈器、即ち空氣に由て動くの仕掛、既に備へられ、時計師其道理に由て機械を組立るも、其彈器の空氣により

身體是使精
神活動好電
機好時器
把來靈物使
活動于物質
界不可不必
賴物質之媒
介

て活動することなくば、決して機械自ら運動を始ることなし、斯く考へ來らば、如何に考ふるも、肉[○]体[○]の[○]一[○]の[○]機[○]械[○]に[○]し[○]て[○]精[○]神[○]の[○]働[○]き[○]場[○]所[○]と[○]云[○]ふ[○]の[○]外[○]な[○]し[○]、抑[○]も[○]靈[○]なる[○]もの[○]を[○]物[○]質[○]世[○]界[○]に[○]動[○]かせんに、[○]の[○]亦[○]物[○]質[○]を[○]使[○]用[○]せ[○]ざる[○]べ[○]から[○]せ[○]、例へん空気を利用せんに、其利用する器械の、或る物質を把り用ひざる可らせ、空気を以て直ちに其用を爲さしむること能はせ、橐籥、風鉄砲の如き、皆其目に見るべき機械ありて、而して目に見る事業をなすなり、今我儕眼を放て宇宙間の凡ての物、乃ち彼の、日月星辰、山川、草木、禽獸、蟲魚、及び我儕人類等を観察し、之を天文、地質、理化、動物、生理、心理、道義、哲理等の學に照して考究するに、實に種々の現象ありて、千差万別なるが、其千差万別の中に一定の法則ありて、新陳代謝、遷轉循環、常に生存の道に従て進めるを觀る、この法則たる、實に奇とも云へく、妙とも云べく、愉々快々、

宇宙之天則
人間之道理
皆有思考然
後爛然燦然

是を以て我儕確かに此萬物が生存活動せるを知る、即ち宇宙の取も直さき、一種我儕が無字の教科書とも云ふべきものにして、其教科書に記載せる事物の、誰の考案に成りしものなるか、我儕人間も其材料の一なるが、其精神や肉体の、誰の考案に因りてかく工妙精緻に、出來上りたる哉、今ま、人、何の考もなく、筆を把て紙上に向かひ、字にも非せ、畫にも非せ、主意もなき趣味もなき、唯淋漓たる墨痕を留めんのみ、音樂に於ても亦然り、之を奏する人、音樂なるもの、理を知り、其譜に従て手指を運轉せざるべからせ、かくしてこそ、其音聲或は悲壯、悽惋、鬼神をも泣かしめ、悠揚、嘲哂、梁塵をも舞はしむべし、左もなくして、音樂を解せざる人、手に任せて、樂器を弄せば、乱雜、喧噪、聽くに堪へざるものあらん、然れば、宇宙万物に種々法則の備り、居るも、別に、之れを考ふる者ありて、其法則を万物の上に普及せしめ

萬物本出于
一故其未亦
善合同一能
而始萬物致
力顯焉而使
之合同一使
者乃人間精
神也耳矣

たるもの、と云はざるべからず、乃ち我儕人類に最も靈活なる精神ありて、種々の思考を起すも、同じく其根本なくんば、あらず、其根本との何んぞや、即ち道なり、命なり、帝なり、勢力なり、故に、万物の道理と、人間の道理と、其本源の同一合体のものにして、人間の考ふる所の万物に適應すべき理なり、而して万物の上帝の意匠、即ち道理に由て造られたるものにして、人間に、尙其万物を能く發達せしむるの職分を與へ、万物になき所の精神を附與せられ、前に既に説きし所の良心初め智情意等の働きありて、彼の万物を支配するの權力あり、其周圍に在る万物の中に、人間が存在して、其人間の一分の物質より成り、一分の精神より成れり、而して人間の本領の精神にして、精神の又上帝の支配に屬せり、而して我儕の義務の此上帝より支配せられたる精神を、肉体即ち機械によりて、能く働かしめて、万物

人間職任至
大至重至貴
至妙

天割自己利
他是人間仁
愛模型

の生存を贊助するに在るなり、是れ即ち人間の職分にして、人間が物質世界の王たる所以なり、然らば精神の根本たる上帝の、其廣大なる考を以て、己の勢力を幾個にも割き、以て萬物を造りて生存せしむるなり、語を換て言ば、一の勢力あり、其勢力の種々千万の物に分與し、奇々妙々にも、其千万の物の相連絡して、人間の支配に歸し、其人間の復其勢力に支配せらる、而して其勢力の常に其造りたる萬物の生存發達を希圖せり、之を名けて上帝との云なり、上帝の精しく云へ、己れを割て他物を利するとの心なれば、我儕人間に於ても常に此世に在て、此上帝の心を心となし、己を割て他を利することを忘るべからず、尙此勢力より進化し來る所の、我儕人間の精神上の事に就て、深く考へざる可らざることあり、何となれば、我儕人間の固と精神と肉体と合化したる上に於て、極めて善良のもの

人浸染惡習
與天理懸隔
矣

養活然氣

なりしに相違なし唯其凡ての事を選ふの自由を任せられて
 種々雑多なる万物中に生活せしか故に、外界事物の誘惑にか
 り、彼の天則にの從ひざるべからせと知りつゝ、も其天則に
 背きて、道より外れ迷ふに至りしなり、而して人間が其親の肉
 体と精神とを分け與へられ、交るく、生れ來るが爲に、其惡き
 性質遺傳して、彼の精神の大なる勢力の上帝と疎隔せり、肉
 体ハ物質より成れるが故に、物質を以て之れを養ひ、即ち肉體
 の物質を培養する食物を用ゐて、其働を助くべし、只精神ハ靈
 の食物を以て、之を養ひざるべからせ、然らざれば、其力衰へ
 て肉慾の爲に制御せられ、其人間たるの職分を盡す能はざる
 なり、故に我儕人間たるものハ、肉體を養ふと同時に精神を養
 ふことを忽にすべからせ、之を養ふの法ハ、則ち本然の天則に
 歸り、精神をして肉體の上に主宰たらしめ、即ち我儕人間に備

人要存天理

研究者察天
理人爲

身體多變化
精神皎々燦
貫千古不變

精神歸天以
熱歸太陽譬
之

る天則に從ひて働きをなすにあり、尙是のみにてハ足らざ
 人間ハ元來其天則に根本たる上帝に遠かりて、微弱になれる
 が故に、其勢力に近づく事を考へざるべからせ、之を能く考ふ
 るとさハ、必き又其勢力に合するを得るの道あり、即ち天理人
 爲を研究考察すること、是れなり、尙肉體と精神との情狀を云
 ふとさハ、精神ハ永遠のものにして、肉體ハ物質的、即ち時々變
 化あるものなり、故に肉體を組織する成分ハ年數を経るに従
 ひ、衰弱消耗して、本の物質に還る、然れども、精神ハ肉體と離る
 れ、本ハ本の勢力に歸る、恰も石炭に熱あるハ、太陽の熱を吸収せ
 るが故にて、之を火に接すれば、炭素ハ元の炭素となり、其熱ハ
 太陽に歸ると同一理なり、故に、もし精神にしてよく培養せら
 れ、少しも傷害を受せ、健康の精神なるに於てハ、其勢力なる本
 源に歸るに於て、自ら大に勢力を存せる理なり、而して我儕人間

健康活潑精神大有勢力
輝脫身體而依然活潑
能糾合本原勢力

人生無益世與禽獸何擇焉不生存物質界不生存靈界竟死止而已

が此世に生れて人間たるの職分を充分に盡さんとするに、其精神必き活潑健全ならざるべからず、もし我儕唯此世に生れ出しのみにて、一も其希望なる最大幸福を得る爲に盡すことなく、一事一業の後世子孫に遺ることなく、禽獸草木と其類を同ふし、物質界に生存することなければ、靈界にも生存する能はき、此の如くなれば、我儕が常に望む所の生存の目的、即ち最大幸福のさして措き、自己一代一身の生存も覺束なく、實に残念至極の事ともなり、されば勢力とは上帝の謂にして上帝の何處に在るかと云ひ、上帝は即ち道理なり、道理を外れて上帝あることなし、道理は實に活たるものなり、精神もし道理を以て培養せらるゝとき、其道理の中には勢力充滿せるにより精神は常に活潑々天長地久生存するを得べし、

第九 最大希望

希望在得幸福得幸福在生存

幸福乃安心知足

順天命則有報名之曰幸福

希望不可不潤大

抑も我儕人間の希望は、幸福を得るに在り、然れども其幸福を得んには、生存せざれば能はき、幸福は如何なるものかと云ふに、即ち高尚聖潔なる安心知足の謂にして、其心中憂ひ悲むことなく常に平和喜樂に満るを云ふなり、さて此幸福は最初より論じ來れる如く、肉体と精神とが、天則に合ひて能く働かば、自然に生じ來るものなり、他語以て之を云へば、天則を神妙に守り行く報賞として與へらるゝものなり、此報賞をバカの智力を以てその幸福たるを知り、情に於て其快き事を感じ、意に於て之を撰擇し、以て安心満足を得るなり、されど幸福と云ふは一の感情なるを以て、天則即ち道理に従ひ行くこと熱心に又其働き廣大なるときは、其幸福も亦從て廣大なるべし、之れに反して、其働き鈍きときは、其幸福の感情も亦從て薄弱なるべし、故に我儕が希望する所大なれば、それに順ふて得る所の

幸福も亦大なるなりされば我儕人間の目的は必き濶大なることを期せざるべからせ、再言すれば、即ち天則に従て勉勵し、所謂仁義の道を充分其身に行ひ、世の公利公益を圖るときは、それに報ひ來る所の幸福も亦極めて大なるなり、而して人間が其目的を達するには必らせ、永存を計らざるべからせ、其永存を爲んには、天則に従ひて、宇宙万物を使用し、我儕が生存を障害するものを防ぎ、生存に便利なるものを採り用ひざるべからせ、其生存に必要なもの、即ち幸福を得るに必要なもの所謂公利公益なるものを、今道義學上より云へば、其極度の幸福を絶對の目的と云ひ、右に述たる所の公利公益を相對目的と云ふ、又一に附屬目的とも云ふ、即ち永存の實體より生る所の幸福を得んとするには、先づ我儕人間をして永存せしむるに必要なる實利を得ざる可らせ、則ち其附屬目的充分に

絶對目的相對目的

永存實利

賴相對目的
達絶對目的
以舟楫食物
譬之

出來て、然る後最大目的に達するを得るなり、而して其心意の働さにより得る所の實利の、其干係甚た肝要にして、即ち絶對目的と相俟ちて進み行かざる可らせ、之を一方より解釋すれば、我儕が從ふ所の天則に残りなく、天地間に浴く行ひしむるには、恰かも河海の彼岸に達せんとするに船に乗らざる可らせ、而して船に乗りて、これに棹さゞれば能はざるど一般なり、尙ほ他の例を舉れば、我儕の生活する爲めに、食物を要し、其食物の滋養分を含めるものならざる可らざると同一理なり、其幸福なるもの、大なるものと、小なるもの、に従て價直の相違あり、即ち、其附屬目的に於ても、實利に於ても、其生存に必用の厚薄に因て價直の違ひあるの道理なり、我儕が生存して得んとする所の最大目的の、宇宙間無比の價あるものなり、又、世の人間たるもの、如何なる人にて、如何なる職業を取

真正幸福其
比無類
貴宇宙間無

萬人希望皆
在一幸福

踏正理不渝
最大幸福既
在掌握中

る人にて、皆目的の此一方に向て進むなり、夫れ人間が幸福
を擇んで進むに方り、其最大目的を外にして附屬目的を擇び
取るが如きことあらば、所謂枝葉に涉りて、其幸福も僅かに肉
体の幸福に過ぎざるべし、或は又其幸福を得る能はざる哉も
計り難し、故に其擇み方最も肝要なり、かく説き來らば、或は淺
見なる人のかくの如く曰はん、たとひ其最大幸福を得んと計
るも、到底我儕一生の中に此の如きものを目に見ることも
出來ざれば、心に感ぜることも出來難しと、これ畢竟天則の何
に物たるを知らざるもの、言にして若し宇宙の道理より人
間總ての道理を辨へ、良心を欺かば、邪道に入らば、淳々乎とし
て正道を踏み行かば、其人のたとひ如何なる境遇に處するも、
安心して最大幸福のすでに其手中に握れるなり、例へば自己
の所有金を百里外の銀行に預けたるも手に其銀行の証券を

坐作進退起
居飲食喜怒
哀樂皆能中
其節

心不_一定則
其所執亦不_一
一定

事確信其必

握りたる以上の其金の儲に自己の所有たるや毫も其心に疑
もなきと同一理なり、故に精神上より云ふも亦人間より云ふ
も、何れに向ふも、其最大目的に達するを得るの確信を得る道
理なり、是に至て始めて安心知足して、日々夜々寝ても起ても、
彼の天則に示されたる所に就て運動し、坐作進退共に宜きを
得、喜怒哀樂、其中を得、而して其人の分に應じたる事業を取て
常に我々として怠りなく、勉め勵むを得るなり、蓋し世の人の
事業の上に失敗を取るの、畢竟其心定らざるが故なり、其心定
らざればこそ、其爲んとする事業も定らば、所謂最大目的立た
ざるが故に、附屬目的も確とせざるなり、今旅行者あらんに其
家門を出るに際し、未だ其目的定らば、躊躇逡巡行先の空を
眺むるのみにして止らんのみ、凡そ一身上の事も爲す所の事
業も、其順路を確信して踏み行かば、たとひ未然に属する事も

成乃既成矣
幸福確信其
必獲幸福既
獲矣

天地位焉萬
物育焉

宇宙萬物各
得其處各竭
其職

於全幸福有
精神與身體

不兩立時宜
省察

為正義殺身
是生存之要

殺一人救千
萬人正義赫
灼精神凜烈

己に成れる如く安心して少も疑ふことなし。又かく一身平和幸福を得るときは一家の者共に其慶に頼り一家より延て一國に至り遂に全世界皆其幸福を享るに至る唯に全世界人類のみならず宇宙間の万物盡く其働きの價直を顯はすことを得るなり此の如く宇宙間の万物が真成に宜さに適ひて生存するに至らば恰かも弘大なる組立をなしたる一の蒸氣器械が蒸氣力によりて活動運轉すると同一なり實に愉快の情態と云ふべし而して此幸福なるもの人間の良心より湧出る仁愛なるものを充分に社會に行ふにありて總ての万有を無用に歸せしめき有用即ち人間の生存を助けしむるに至る是れ即ち人間の誠實なる勉強に由て得らるゝなり我儕人間の希望目的の實に此幸福にあり此最大目的を達せんとするに即ち場合によりての心靈上と肉体上と兩立せざることを

ありたどひ附屬目的が完備せざるため其肉体を誤まることありとも其最大目的の決して棄べからず即ち正義の爲めに生命を抛たざる可らざる場合あり其人たどひ生命を抛ちても其良心に愧ることなく良心を満足せしむるにより乃ち大なる幸福なり又此の如く正義の爲即ち天則の爲に其支配せる肉体を害ふ少かの肉体を殺して多くの正義を世に發揮するものなり社會全体より云ひ即ち生存を妨ぐる物の爲に少かの身体を損して多くの生存に必要な所の道理を明にする譯にして其人の精神の其廣大赫灼たる所の道理と共に永存するを得るの理なり此の如くなればたどひ其身死したりとも少も最大幸福の目的に外ることなく寧ろ乃ち其目的を達したるものと云ふべしされば我儕幸福の目的を撰ぶ者其果して永存すべき幸福なるや又一時的情慾に屬せ

る死滅すべきものなるやを考ふること尤も肝要なり。

第十 新天新地

隨積德行增
其人價直

抑も人の則ち考ふべきもの考へたる後「我」なるものゝ生存を認め、然る後我歩むべき道の本源、即ち天則を見出し、其往先の乃ち最大幸福の境域なるを信じ、而して其道を歩むに其歩を誤ることなくば、必き幸福の都に達すとの希望を抱く、故に安心して進むことを得、又其一日一日の事業を怠らざり、勉め勵みて德行を積めば、其人物に價値を生じ、次第に幸福なる人間となるべし、然れども人生の旅行と同じければ、注意して進むにあらざれば、端なく岐路に迷ひ、竟に最初の目的を失ふことあるべし、故に昔時希臘の學者ソロンソロンの「凡て人死に至るまで幸福完成すべからざり」と云ひ、又支那の曾子の臨終の際手足を伸し、其弟子に示して「先づ今日まで幸に世の譏りを免れ、今

碩學二會格
言

重荷を下して安堵せり」と云へり、かく聖賢の言に由るも、我儕の世を渡るの重きべきを知るべし、我儕一定の目的に向て進むも少く油斷すれば、忽ち邪道に踏み迷ふの憂あり、故に人間の、その世を終りて後ち、始めて其善人たりしや、又惡人たりしやを知らるゝなり、古語に所謂棺を益ふて事定まるるとい、此事をや云ふならん、而してまた油斷なく着々として、正路を踏み行かば、彼の最大目的に附屬したる所のものも、自ら其目的を誤らざることを得るなり、上帝の慈愛によりて、我儕に分與せられたる万物の、我儕人間を圍繞し、其中にの皆悉く天則を備具し、其天則の些細なる所にまで行れざるなし、又我儕人間に於ても、心霊より肉体に至るまで、能く天則行のれ、而して我儕人間の天則を守りて生存するに、万物の天則によりて存在せるものを、益々發達進化せしめ、以て我儕を天則に由て生存

本理想未情
感而行

せしむ。而して我儕の情感のみに由て働かざり。理想に基きて働
くべきなり。蓋し人情感のみに由て進退せば、万事其肉体の上
に取て、都合宜きが如し、されども是れ一時の事にして、然も
往々過誤に陥り易し、故に前に云へる如く、天則即ち道理、即
ち理想に従ひ、良心の指揮する如く進行せざる可らざる。かくの
如くにして、始めて能く生存の道に合ふべく、社會百般の事物
皆我儕が生存の爲に利益することゝなるべし。抑も法律の何
がために世に存するか、惡を懲し善を勵すが爲めにあらざるや、
若し法律にして、惡を助け、善を罰するが如きことあらんか、是
決して法律にあらざるなり。又政事との如何なるものか、多
くの人に平安の生存を得せしめんがための機關にあらざるや、
されば若し政事にして、人間の生存を害するが如きことあら
ば、是れ決して政事にあらざるなり。經濟との何ぞ、乃ち無用

末情感本理
想是進歩真
相

を活動して有用となし、以て人間の生存を計るの途にあらざ
や、若し有用を無用に變ざるが如きことあらば、是れ經濟にあ
らざるなり。凡そ社會に顯れたる所の法則の基く所、皆天則
より出でざるのなし、その能く情感の事を後にし、理想に進む
の即ち真正の進化にして、人間の心靈と肉体と相並て進化し、
かの優勝劣敗の理に由て、益々人間が勢力を得、世間の万物を
支配し、又使用し、而して己の職分を盡して、上帝の恩に報ふべ
き也。或は世の中の道理のみによりて進まば、無味にして、醜
たる様に考ふる者あらんか、決して然らざる。かくしてこそ人間
の始めて善良にして、快潤に赴くべし。何となれば、道理の眞な
るものなり、善なるものなり、美なるものなり、樂しきものなり、
弘大なるものなり、而して之れに則る凡ての事、豈に善良快潤
に進まざるの理あらんや、今我儕天則によりて、顯はるゝ所の

道者眞也善
也美也快也
大也

天造物則美

妙不可言故
美術良師措
天造物而不
他在也

隱遁者可謂
失人間職任
者

一人善惡大
關係國家休
戚

万物を見るに、其美妙にして、趣味ある實に言ふべからざるものあり、故に、我儕家を作り、器具を作り、彫刻をなす、みな其様に倣はんことを務むべし。

世間に、達人君子と云る人、まゝ世の腐敗するを見て、憤懣に堪え、自己を潔くするとて、山林に隠れ、世と隔離し、活淡無味絶て、世事を云ひざる如きあるは、是實に天則に背く大なるものなり、もし多くの、人、國家危急の時に際し、皆かくの如き考へを起さば、其國忽ち亡ぶべし、深く考ふべきことなり、蓋し人、不注意なれば、善人も悪人となる如く、其人体の集合体なる一國にも、亦大なる影響を及すなり、故に、其國人にして、能く道理を辨へ、物事に奮勵すれば、其國の榮へ、隋弱暗愚なれば、其國の必ら、衰ふの理なり、是を以て、一國の人々が、決して道理を踏違へざる様、熱心に進み行くと、さ、其國の盛大に趣き、其國人の

良因生良果

人多様惡因
欲得良果惑
亦甚哉

欲得幸福傷
幸福欲得安
心增苦惱世
間比々皆是

生存の福を享くべし、然れど我儕退て熟ら、今日の時勢を察するに、兎角世の人の、目前の幸福に、腦まされ、其本体なる道理に合ふ哉否を問はず、恰も岐路邪道に、彷徨するもの、如し、抑も良因あれば、良果あるの、動かすべからざるの、天則なるに、世の人の、皆惡因によりて、良果を獲んとせり、豈に愚蒙の甚しきなら、ちや、一時の情慾に、制せられ、目前の利慾に、惑ひ、而して、心も身も、永久の幸福、満足を、得んとする、の實に、愚蒙の甚だしきにあら、ちや、世人が言ふ所、爲す所、多くの、此類にして、其外觀の、竟に、永存を、欲せざるもの、如し、今其爲す所、言ふ所を見るに、永存の、道に、合へるもの、幾許かある、凡そ、徳義に、欠けたるの、行爲の、皆命を、害するものなり、幸福を、害するものなり、終に、苦痛を來すものなり、然るに、世の人の、幸福を、得んと欲して、其爲す所の、幸福を、害ふの、行を、なし、安心を、得んと欲して、苦惱を、起すの

鍛練心意
操道義心

標眇始看
金界

事をなせり、是れ先きに論せし如く人間古來の習慣性に制せられたると、一にの智識の開發せざるが故なり、かく云ふ予ども亦其範圍中にあるものなり、と雖も、苟もかくまで考へ來りし上の、其思ふ所、言ふ所、實際に行ひ、以て世路の嶮波を踏み、人生の大目的を達せざる可からざると信ぜ、嗚呼習慣遺傳の力の強ひ哉、唯だ心意を練磨し、道義の念を盛にせしむるの外、之に勝るの道なきなり、若し心意練達道理内に明かなれば、精神肉体を支配するを得、又其目的とする幸福を確信せ、良心の指定する所、斷々乎として之を行ふに至らん、人此に至らば始めて眞の人間と稱へらるべく、一個の獨立の全くして自由の伸張し、權利の鞏固ならん、而して其感化の一國に及び、一國こゝに榮へて、新天新地黄金の世界を現出するに至るべし、豈にまた愉快ならざ哉、

Soeder Jase

人間畢

明治廿五年三月十五日印刷
全廿五年三月十七日出版

定價金拾五錢



著作者 土居通豫

東京市京橋區南傳馬町二丁目十四番地寄留

發行者 青木恒三郎

大阪市南區末吉橋通四丁目四十三番地

印刷者 山口恒七

大坂市心齋橋筋安堂寺町

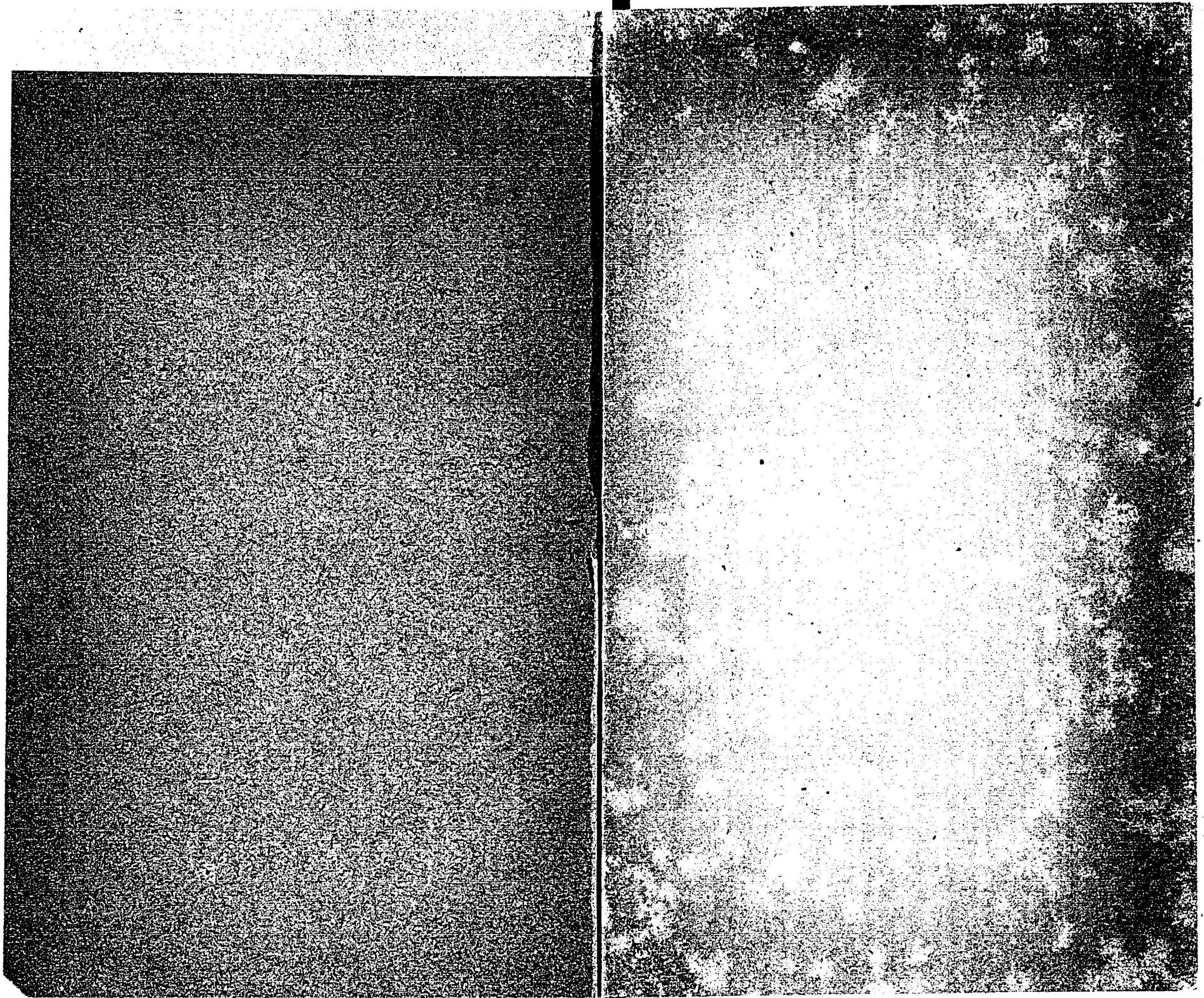
製本所 青木嵩山堂

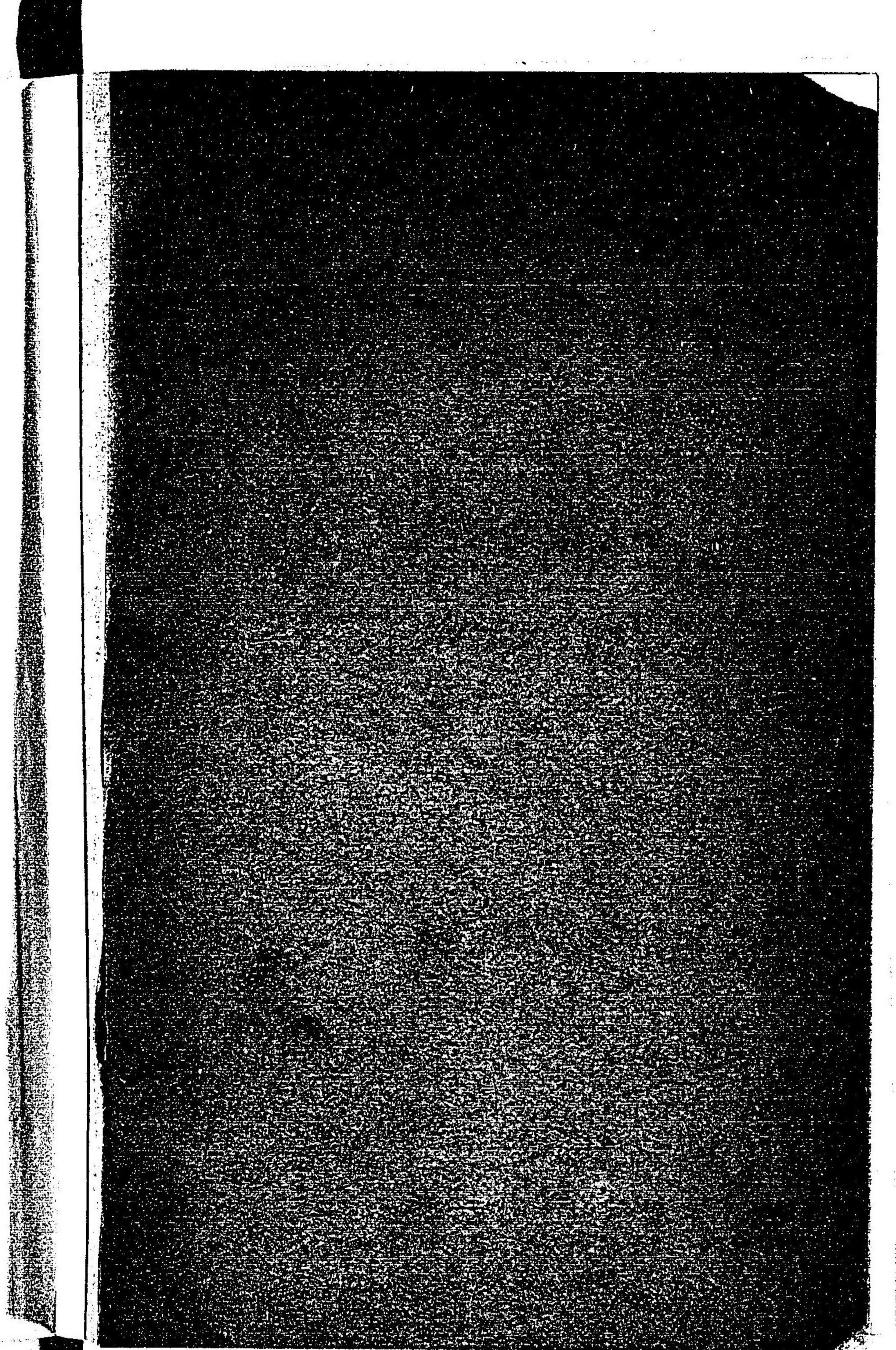
東京市京橋區南傳馬町二丁目

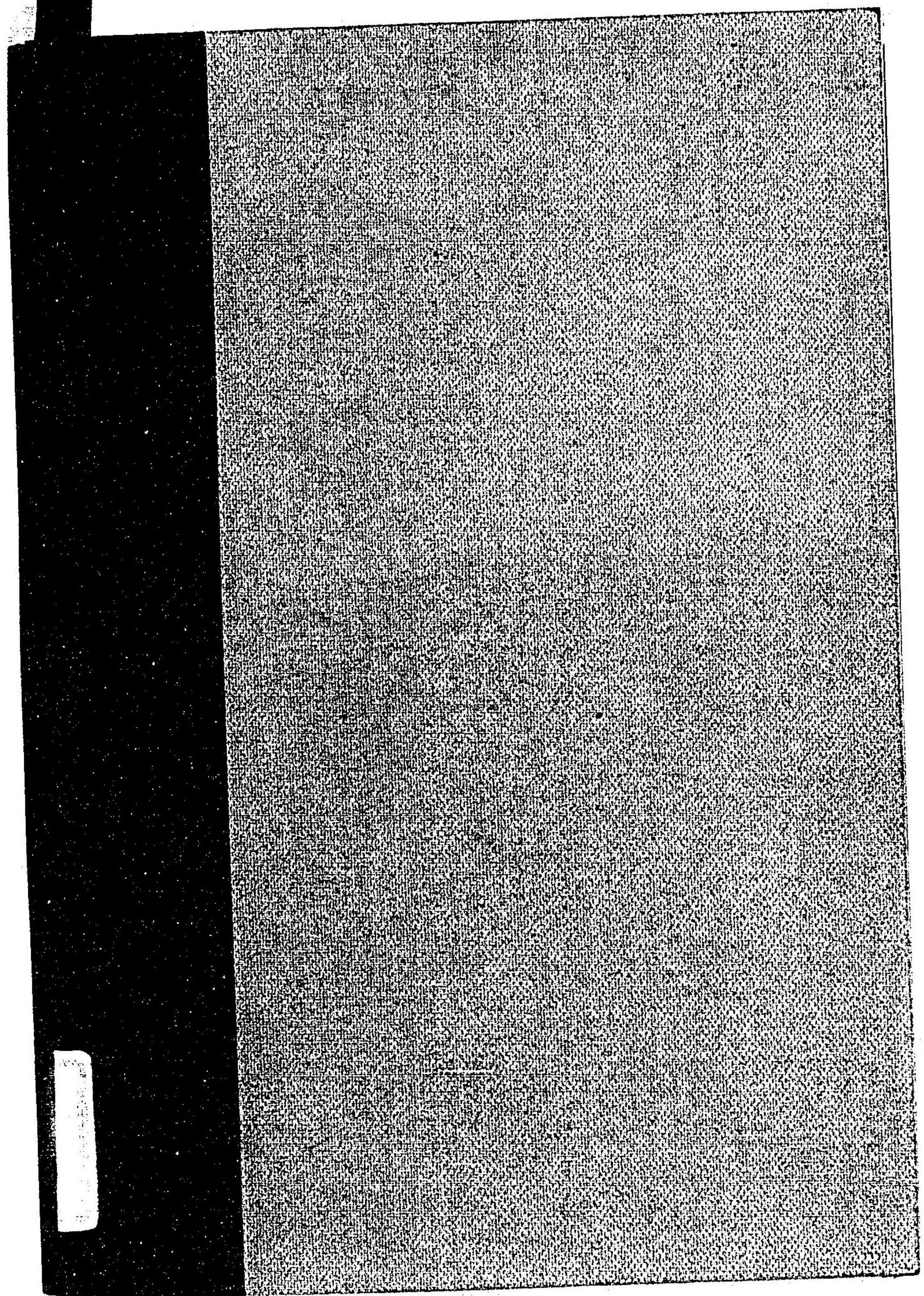
發賣所 青木嵩山堂

勢州四日市港堅町

全 嵩山堂分店







100

特21

972

人間

土居通豫

国立国会図書館

011217-000-6

特21-972

人間

土居通豫/著

M25

AAE-2862

